

掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成13年3月31日発行

鵜沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 8 2 号

『東屋記念碑』 設置記念 特集号

（目次は表紙裏にあります）

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵜沼村久久比奴末半良」
とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵜沼を語る会 発行

『東屋記念碑』設置 記念特集

念願久しかった「東屋記念碑」が、藤沢市教育委員会の手で建立された。場所はかつて東屋の正門があった鵠沼海岸2-8-26。現在は永井修二氏邸で、その正門わきの一角を、永井家が無償で提供してくださったのである。東屋がのれんを降ろしてから実に62年目、計画が持ち上がってから3年目の建立である。日本近代文学史の中で、その名のみは高かったものの、本来の所在地さへ間違っただけで伝えられることが多くなっていた東屋も、これで正しく認識されることになるだろう。



記念碑の除幕式は、2001年3月22日午前10時から行われた。

鵠沼公民館で記念式典を行った後、記念碑の場所に移って除幕した。山本捷雄藤沢市長、松井芳子市教育長、作家・佐江衆一氏、小山文雄元市教育長、川上恵久「鵠沼を語る会」会長が除幕の紐を引くと、「文人が逗留した **東屋の跡**」と見事な書体で刻まれた小松石の碑が姿を現した。鵠沼地区では初めてのものとなる文学碑である。

碑文を揮毫したのは佐江衆一氏。碑の横に建てられた説明板の文章を「鵠沼を語る会」が担当した。



記念碑建立を記念して、今号は『東屋記念碑』設置記念特集号とした。

東屋に逗留した三人の文学者に思いを込めた小山文雄氏の『東屋三題』をはじめ、長谷川祐氏の子どもころの追憶記、さらに姉上池田真弓さんとともに記憶をたどりつつ作成された関東大震災後の東屋内部の詳細な地図、同家所蔵の東屋の写真、わざわざ山口県田布施町から寄稿してくださった佐伯忠男氏の戦中の思い出の記など、いずれも今後、東屋を語る際には欠かせない資料となるものと思われる。

また、会員の伊藤聖氏が作成した「東屋関連年表」は、単に東屋の歴史としてだけでなく藤沢文化史の資料としても貴重なものとなるだろう。

神奈川文学振興会の提唱で具体化

(編集委員会)



「東屋記念碑」除幕式

平成13年(2001)3月22日午前10時30分、地元の人々や「鶴沼を語る会」の会員たちが見守る中で、記念碑の幕が取り除かれた。清楚な感じの石碑が姿を見せると、参会者たちはいっせいに拍手して、鶴沼地区では初めてのものとなる文学碑の建立を祝った。この日はホカホカ陽気で、横浜地方では桜の開花が告げられた。

「東屋記念碑」建立の計画が、具体的な話として持ち上がったのは、平成10年10月のことだった。藤沢市教育委員会生涯教育課から『鶴沼を語る会』に対して、「記念碑設置の方向で計画案をたてたいので、協力を願いたい」との要請があったのである。

もともと当会としても「東屋記念碑」の建立は熱望していたところであって、平成9年春ごろから、私的な会合などを通してではあったが、市の関係者などに対し記念碑の実現を懇願し続けていたのである。しかし、それは実際問題として夢を語りかけるようなところがあった。それがこの市側の要請で、にわかに現実のこととして動き始めたのだった。

生涯教育課が「東屋記念碑」建立へ向けて具体的な動きを始めたのには、一つ

その様子は細かに書き留めてある。その散歩コースの一つに鵜沼があり、東屋跡付近の道も含まれていたのである。佐江氏はそうした散歩の中で東屋記念碑の建立を思い立たれ、財団法人神奈川文学振興会理事会に諮ったうえで藤沢市へ提唱されたのだった。佐江氏の提唱は、当会にとって願ってもない幸運だった。佐江氏と財団法人神奈川文学振興会の後押しは、記念碑建立を実現するうえで、この後も大きな推進力となっていく。

平成10年12月17日 「設置検討委員会」としては最初の会合が開かれた。

平成11年3月23日 『語る会』から藤沢市長宛に記念碑設置の要望書を提出した。住民の要望にこたえて市が作業を開始するという、いわば行政の形式を整えるための意味もあった。またこの時点で、『語る会』から鶴沼在住の右近家と長谷川家に計画の概要を伝えた。両家は東屋の創業者・伊東将行と長谷川ゑいの流れを汲む家系である。両家ともに喜んで計画に賛同してくださった。長谷川家の

現当主祐氏は、これを機に『語る会』の会員として参加することも決められた。

以降、市側と当会との間では、7回にわたる検討会が持たれた。

一連の作業の中で、最大の懸案は記念碑の設置場所の選定だった。幾つかの候補地が挙げられたが、最も適地と思われたのが、永井修二氏邸の玄関付近だった。ここはかつての東屋の正門（10ページの真鑑）があったところなのである。記念碑の建立場所としてこれ以上のところはないであろう。

平成11年10月 永井家に対して『語る会』から記念碑建立の計画が進められていることを告げ、場所の提供について相談した。そして、同家から内諾を得ることができたのである。おかげで最も難渋すると思われた記念碑設置の場所は、予想以上に早く見通しがついた。永井家のご理解とご厚情には改めて感謝する。

平成12年6月 藤沢市定例市議会で平成12年度補正予算が決定され、記念碑設置事業もその中で認められた。夢は間違いなく現実のこととなった。

同12年9月12日 「設置検討委員会」で記念碑の姿などについて最終的な論議にはいった。碑文はそもそもの提唱者でもある佐江衆一氏が揮毫すること、記念碑横に立てる説明板の文章は『語る会』が担当することなどが決まった。

同年10月17日 『語る会』10月例会で、川上会長から「建立用地提供について市と永井家の話し合いがあり、同家から正式に了承を得ることができた」との報告があった。また当会が担当することになっていた説明板の文章案も完成、例会の了承を得た上で市及び佐江、小山両氏へ提出した。

同年10月31日 この日が最後の「設置検討委員会」となった。

当会から提出した説明板の文章案を全委員で検討、若干の文言を修正し、最終稿については佐江氏に一任することが決まった。また同氏が揮毫する碑文は「文人が逗留した 東屋の跡」とすることも決まった。

平成13年2月3日 説明板の文章の完成稿が市側から示された（3ページの真鑑）。

記念碑の姿も、市側から具体的に示された。石材は小松石、高さ150cm、幅60cm、厚さ20cm。また鵜沼商店街の通りから記念碑の場所へ折れる角にはステンレス製の標柱（高さ160cm、幅10cm）を建てること、鵜沼公民館に記念碑の案内板を作ることが決まった。さらに小田急電鉄の好意で、小田急江ノ島線鵜沼海岸駅の改札口と下りホームに記念碑の案内板が設置されることも決まったのである。

記念碑実現に努力していただいた市教育委員会、財団法人神奈川文学振興会および関係者の方々に、『鵜沼を語る会』として心から感謝したい。

東 屋 三 題

小山 文雄

〔 神奈川県文学振興会評議員 〕

〔 元藤沢市教育長 〕

東屋に文人の訪れは絶えなかった。明治、大正、昭和と社会のおもむきは変わっても、変らぬものがそこにはあった。その佇まいと持てなしのほどの良さ、松の香のまじる海の匂いは文人たちに沈静をもたらし、またお互いの^{よし}誼にまぎれる気質の違いにふと思いが行って情念がかきたてられる。執筆の手を止めさせるのも促すのも、日常と非日常^{あい}の間を作り出す東屋の気なのである。東京から二時間ほどの距離も恰好であった。その東屋の気に揺れた三人の素描を試みよう。

一、おもふ事なくて佇む我身かは

^{さいとうりよくう}斎藤緑雨が療養をかねて東屋を訪れたのは明治三十三年十月のことであった。半年ほど前に、結核のほんの初期だから、転地したら必ず癒る、半月もしたら仕事をしてもよいと言われて、その気になったのだが、病苦と貧苦の折り合いがつかぬままに半年の余をすごし、ようやくの鵠沼行であった。

緑雨は毎日のように江の島を眺め時には訪れてそのさまを日記に書きとめる。

江ノ島烟ル、松ノヒマヨリ、波ノキラキラ

※

^{えのごとし}富士美シ江ノ島美クシ皆如画

美シカラヌ身ヲココニ置クベキニアラズ 帰ラネバナラヌヤウニ思フハ ヤハリワレハ塵ノ中ノ人カ

※

江の島裏道 木ノ葉カ木ノ実カ カサコソト音スル 片瀬竜口寺 まんぢう

※

園ノ露 庭前ノ松ヌレテ鮮カナル間ヨリ江ノ島ノ煙レルガ ホノカニ見エテ日ハ暮レル 珍ラシク静カナル 雨 アカルカリシ

むろん仕事もしなければならない。翌月の『太平洋』には「青眼白頭」を載せた。原文は総振り仮名だが、ここでは一部のみ残した。

「○志を抱いて死す、さもしからずや。一般字典の訓^{おし}ふる所によれば、大丈夫は男の義なり、女を抱いて死せんのみ。何で死んでも広告代は同額也」

冷笑といえど冷笑、本音とみれば本音、苦渋ととれば苦渋、さて緑雨はどこに居ると、こんな短文を二十四も書いた。最後の項は

「○按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵^{しゅうか}せずと知るべし」

緑雨の名と共に長く伝えられた言葉である。

そんな貧乏極まりない緑雨の部屋に、ある日泥棒が入って着物と羽織と帯とを盗んでいった。——「ココモ浮世ノ夢穩^{おだやか}ナラズ」。

緑雨が東屋で得た最大は女中頭の金沢タケであった。色の恋のというほどのことでもなさそうで、タケがある日雑誌の口絵写真に文士と妻の写真が載っているのを見て、文士と一緒になれば自分もここに載るかもしれないと思ったから、とも伝えられている。しかし結局は最後まで見とってくれる人を得たのであるから幸せだった。年が明けて四月になり、タケの縁に寄ることにして一緒に小田原に移ることにした。そしてその直前に書いた「鵠沼より」が別れの文章となった。

緑雨はその中で「家清きは東屋を以て第一」とし鵠沼の開拓者としてその主人伊東将行を称えていた。ことに執筆の前日に東京朝日に報じられた下藤ヶ谷の古墳土器の発掘に同行したのは貴重な経験となった。

しかし、どんなに珍らしいことがあろうと、

「望京嘆^{ぼうきょうのたん} 何カハ知ラズ泣キタイガ病」

に罹る。出版界は青年向け、地方向けでなれば売れ行きがよくないと変っても、緑雨にはやはり都が良い。そう言いつつ、都よりさらに遠い小田原に落ちてゆく。

「おもふ事なくて佇む我身かは されども秘めよ浜の夕浪」、緑雨はすでに浜の気に包まれていたのであった。

二、かげろふや塚より外に住むばかり

芥川龍之介は大正十五年四月下旬に、ちょっと鵠沼へ養生に出かけたが、客が多くてぐったりしてしまい、いつとき湯河原に移り、東京に戻ったりもした。しかし夏からはほぼ鵠沼の東屋に居つくことになった。

「風に吹かれてゐる棕櫚^{しゅうろ}の葉よ お前は全体もふるへながら、縦に裂けた葉も

一ひらづつ 絶えず細かにふるへてゐる。棕櫚の葉よ。俺の神経よ。」

「棕櫚の葉」と題した詩、こんな神経のなかで、「やっと小説らしいもの一つを書いた」と告げたのが「点鬼簿」であった。点鬼簿とは過去帳のことで、そこに戒名を留めている母と夭折した姉と実父のことがテーマとなっていた。書き出しはこうだ。

「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない」

生れてすぐに母が発狂してしまったので、芥川は母方の伯父のもとに引きとられて育った。そして十一歳の時に母は死んだ。そんな母であったのだが、芥川はその臨終も葬式も、命日も戒名さえもはっきりとおぼえていた。

夭折した姉は「初ちゃん」といった。仏壇には小さい写真が飾ってある。芥川はなぜかこの見知らぬ姉に或親しみを感じている。そして幻のように、今生きていれば四十恰好の女の人が一人、自分の一生を見守っているような気がしている。命日は四月五日と覚えている。しかし、戒名は覚えていない。

養家に育ったせいもあって芥川は父にも冷淡だった。新しい果物や飲み物を教えてもらったこと、中学三年生の時角力をとって柔道の業を使って投げ倒したことを覚えているだけで、芥川が二十八歳の時に父はインフルエンザで死んだ。病院に見舞った時、芥川の知らない昔のことを、手を握ったり撫でたりしながら話すのを聞いているうちに臉が熱くなった。それでも芥川は実父の命日も戒名も覚えてはいない。

この春に芥川は妻と谷中の墓地に墓参りをした。それをこんなふうにした。

「僕は墓参りを好んではゐない。若し忘れてゐられるとすれば、僕の両親や姉のことも忘れてゐたいと思つてゐる。が、特にその日だけは肉体的に弱つてゐたせゐるか、春先の午後の日の光の中に黒ずんだ石塔を眺めながら、一体彼等三人の中では誰が幸福だらうと考へたりした。

かげろふや塚より外に住むばかり

僕は實際この時ほど、かう云ふ丈草の心もちが押し迫つて来るのを感じたことはなかつた」

この句は内藤丈草が師の松尾芭蕉の墳に詣でて自分の病身をおもふとして詠んだものである。ゆらゆらとかげろうがゆれている。師は塚の内に自分は外に居る。それははたして幽界と顕界とを分けていることなのだろうか。丈草のその思いは、

墓前に立った芥川に、死に隣りする静もりを伝える。その静もりは幽と明とを重ねあわせて芥川の心象風景となる。

この年暮に大正天皇が亡くなり世は昭和と変る。それから半年の余を経て、「将来に対するぼんやりした不安」を言い残して芥川は自殺したのであった。

「点鬼簿」はあの「鵠沼雑記」に書かれたなまの無気味さを東屋の気によって昇華させた作品と言えるであろう。

三、主として今日の軍部のことを……

昭和十四年、日中戦争はすでに泥沼にはまりこみ、軍部、右翼のファシズムは思想の園にずかずかと入り込んでいた。河合栄治郎も前年九月に三冊の著書、それも八年前、五年前、二年前に出版され広く読まれていたものを発禁処分とされ、この年初めから検事局の取調べを受け起訴された。東京帝大経済学部教授の職も休職となった。ファシズムに抵抗するために、理想を掲げて内面の苦闘をつづける自由主義の砦はもはや落然としていた。

四月十五日、横浜に出たついでに足をのばした河合は二十数年ぶりに東屋に宿をとった。そして、「始めは気分がよくなかったが、離れに来てからよくなり、主として今日の軍部のことを考えた」のであった。

翌日、夕食後藤沢に出てみた。

「夕食後藤沢へ行き街を歩き、とある喫茶店へ入ったが之は大変気持がよかった。そしてそこで読んだ四月二十三日のサンデー毎日の『選ばれた種子』と云う小説がひどく胸を打ち、何かしら今までにない新しい方へ自分の顔を向けた。そして昨今のことが小さいこととなった。之は二月以来珍しいことであった」

この小説は、晩年の良寛と、彼の心に華やぎを添えた貞心尼との交遊を描いたものであった。良寛六十九歳、貞心尼二十九歳の出会いから四年余の、情愛こまやかに行き交うその美わしさは稀有とみえた。

貞心尼が良寛の庵を訪ねて帰るきわに、

「立ちかへり又も訪ひ来むたまほこの道のしば草たどりたどりに」、と一首贈れば、良寛は返して詠じる、「又も来よ柴のいほりをいとはずばすすき尾花の露をわけわけ」。

春になって、「おのづから冬の日かずの暮れゆけば待つともなきに春は来にけり」、と貞心尼が手紙に添えれば、良寛も返書に、「天が下に満る玉より黄金よ

り春のはじめの君がおとづれ」、と心を伝える。

また、しばらく訪れがないと、「あづさゆみ春になりなば草の庵をとく出て来ませ会ひたきものを」、と誘いもする良寛であった。

文政十三年（一八三〇）の暮に、良寛病床に臥すと聞き、急ぎ駆けつけた貞心尼に、良寛は一首贈った。

「いついつと待ちにし人は来りけり今は相見て何か思はむ」

年が明けて正月六日、良寛は貞心尼らに看取られて示寂した。

この小説にふと心はずむ河合はそこにひとときの至福を得た。小説の作者は、末尾に、「（貞心尼に）安心立命の聖悦が、燃えあがってきた」と記して一編を閉じていたが、喜悦にも聖なるものがあることを河合は「新しい方」ととらえたのであろう。聖にせよ俗にせよ、悦もまた流れる気か。

しかし、この年、東屋はほぼ半世紀にわたる歴史を閉じてしまったのであった。

（完）

【資料発掘】江見水蔭『自己中心 明治文壇史』（昭和2年、博文館刊）から

「緑雨が静養した鵠沼の宿は、例の東屋で、自分の片瀬時代に裸體で訪問した事のある小川暁夢の家なのだ。然るに此時には、小川が去って、其後を引き受けてゐたのが、不思議な縁で、我々が能く遊びに行った牛込吉熊の女中頭のお榮といふのであった。」

「硯友社の旅行會を、相州鵠沼の東屋で開いたのは五月二十三日（引用者註 明治41年）で、これは牛込の料理屋吉熊の女中頭お榮といふのが、今は主婦として盛大にやってゐるといふので、久々で昔馴染が打揃って訪ねたのであった。（緑雨のローマンスを聞いたのは此時であった。）

思案、眉山、桂舟、龜石、小波、程山、風谷、柳浪といふ顔觸で、此所に一泊した。」

（引用者註 この文章の後には、宴会後に撮ったらしい記念写真が添えてあり、その中に「東屋女將」として長谷川ゑいも写っている。）

長谷川家のアルバムから

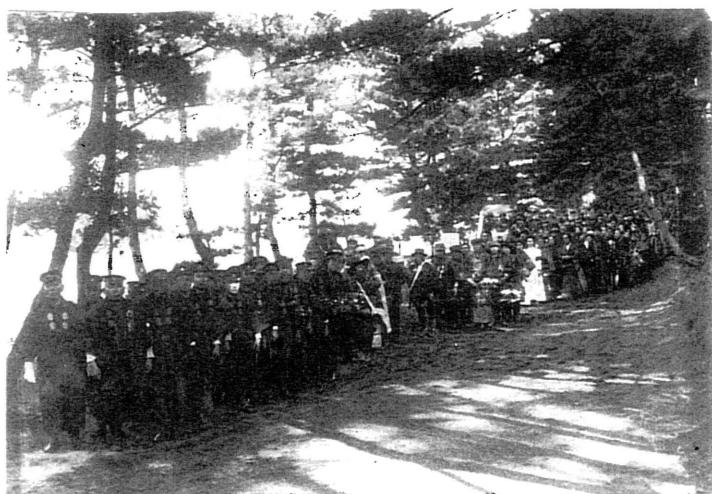


(上) 東屋の正門（震災前）
(下) 東屋（池から本館を望む、震災前）



(上) 長谷川家の人々—
前列左から、その、たか
(抱かれているのが路可)、
母、蝶、寿々、後列右端が
長谷川ゑい。たかの右後が
繁造 (明治 30 年頃)

(中) 東屋の庭に集ま
った自警団

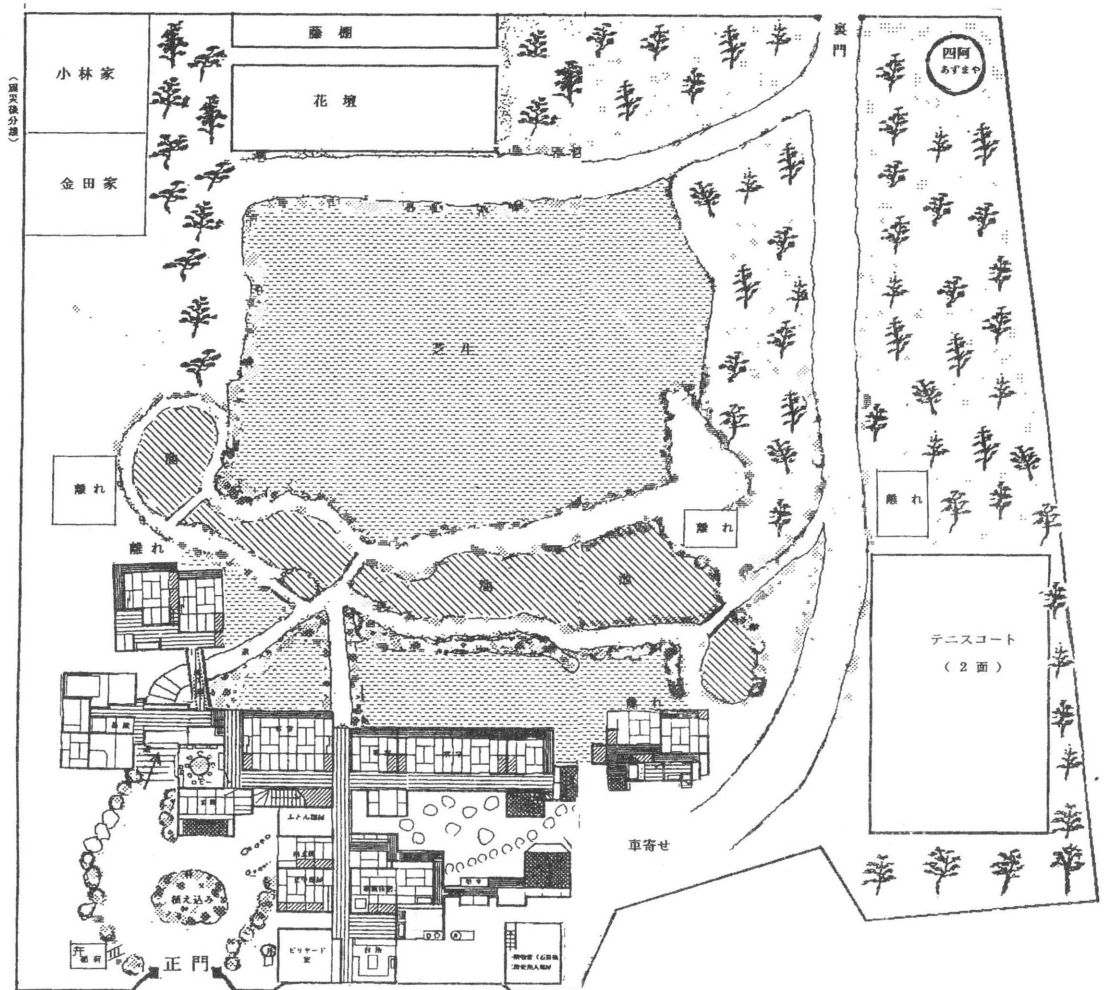


(下) 所沢から耐寒飛行で
鵜沼海岸に着陸した飛行機
の前で。右から 3 人目が伊
東将行。(大正 6 年 1 月)

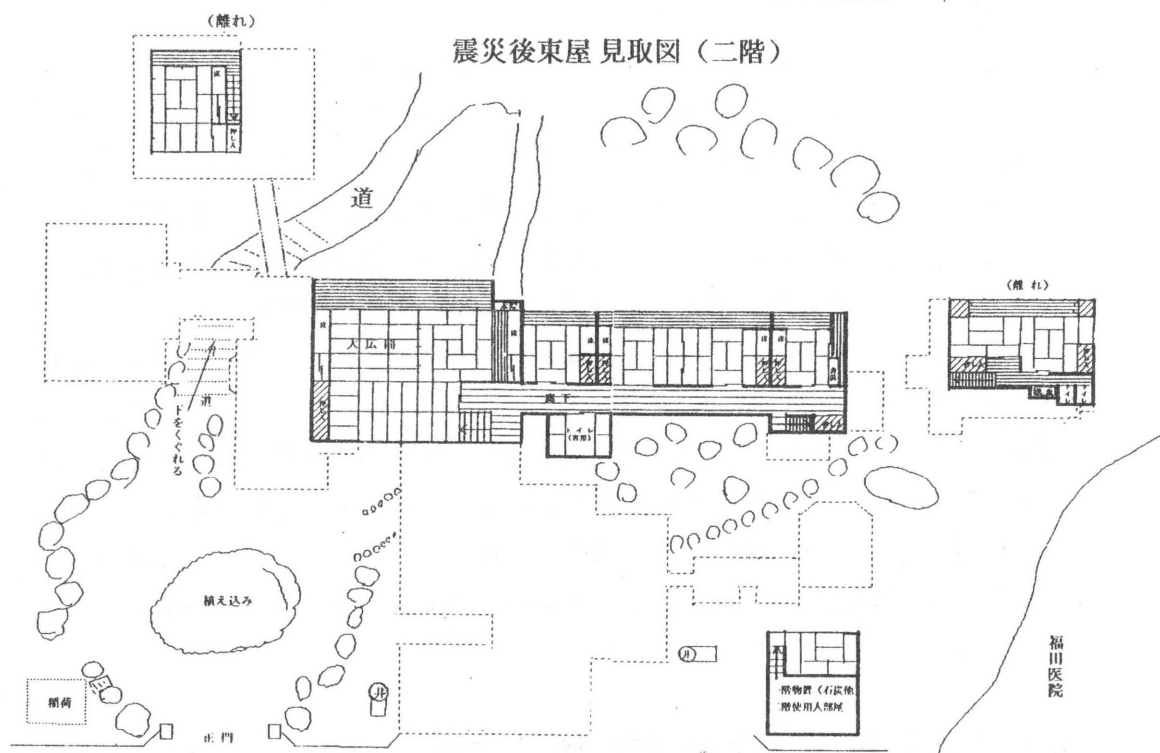
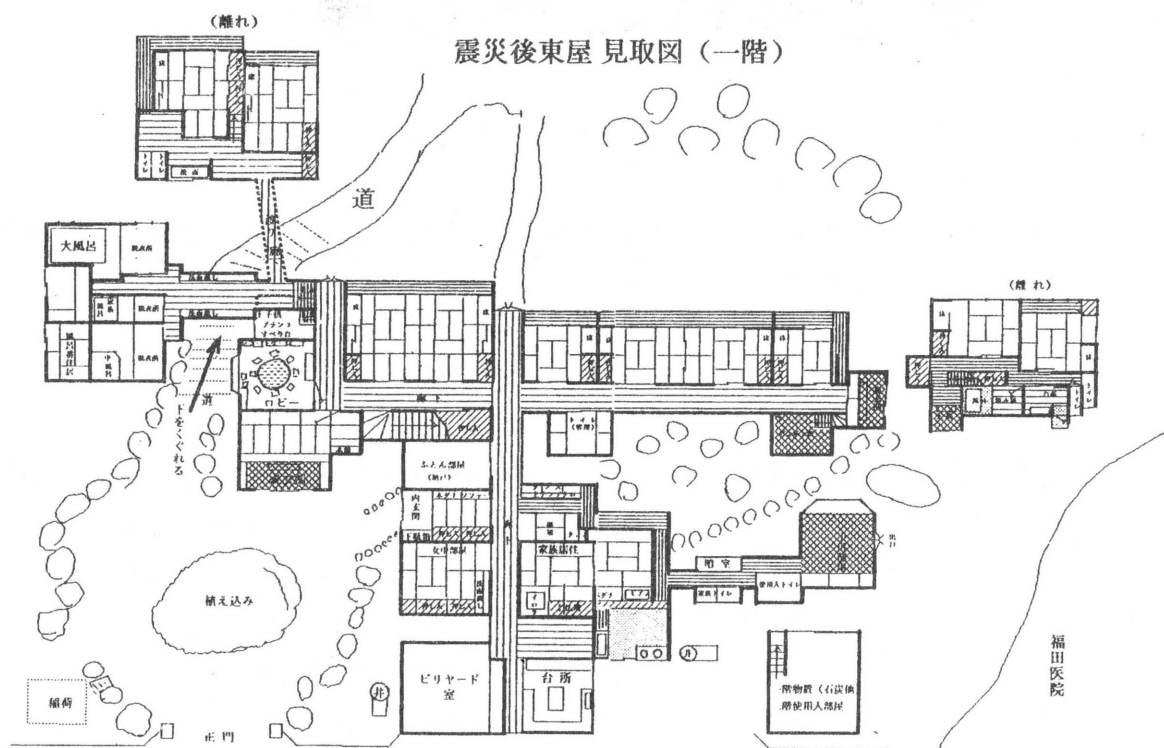


東屋庭園配置図（震災後）

N



制作 池田 真弓 協力 『鶴沼を語る会』
 長谷川 祐 (無断転載転写を禁じます)



子どものころの東屋

長谷川 祐（会員）

東屋が廃業してから早いもので60年余が過ぎましたが、いまだに幼いころの東屋での生活が鮮明に記憶に残っています。

ご承知のように、父欽一の叔母ゑいが経営して有名な旅館にした東屋は、関東大震災によって致命的な打撃を受けました（当時ゑいはすでに故人）。

しかし、ゑいの姉たか（画家長谷川路可の母）を中心に、ゑいの妹たちの嫁ぎ先である福田、後藤両家を中心とした一族の団結と努力によって東屋は直ちに復活し、欽一を経営者として再スタートを切ったと聞きます。とはいえ父欽一は生来の性格から旅館業という水商売には全く向かず、また母綾子もお嬢様育ちで口八丁手八丁のおかみとは程遠く、二人とも余り熱心な経営者ではなかった模様です。幸いなことに、叔母ゑいが残した東屋の知名度と財産は当時としては莫大なもので、われわれ三人の子どもたちも子ども一人に一名の専任女中さんがつく恵まれた私生活でした。

震災前の東屋とはほぼ同じ設計で再建された東屋の建物は、以前と比べだいぶ見劣りしたと聞きますが、お客様は多く、夏場にはお客がいっぱいで家族は奥の子供部屋で寝起きする程でした。

当時の鵜沼は別荘地であったこともあり、避暑客の他、病後の療養に滞在される方もあり、長期滞在者の方々と家族ぐるみのお付き合いもあり、子供同士は仲良く広い庭や池で遊んだものです。母からはよく〇番のお部屋のおばちゃまの所にはいってはいけませんと叱られ、子供心に不審に思いましたが、多分軽い結核の人が転地療養されていたものと思います。

来客の中には、旧来からの作家の方もいましたが、当時は既に鎌倉や他にご自宅のある方も多く、大正時代程目立ちませんでしたが、武者小路実篤さんは廃業までよく来られ、同氏の絵が自宅には随分と残っていました。また、俳優座の村瀬幸子さんと親類付き合いだったこともあり、新劇の小山内薫、千田是也、岸輝子さんらがよく泊まっていたいました。

思い出消えぬ潮風漂う庭

広い池と季節の花々、数百本の松が散在した潮風の漂う庭は今でも思い出から

消えません。大きな鯉のいる池では米粒で釣る予定の鮎に替わって1メートル強の鯉がかかってしまい逆に池に釣り込まれた経験もありました。

東屋の果たした役割については鵜沼在住の方々との交流もあります。正門横（今回建立された記念碑のある所）に祀られていたお稲荷さんの祭礼が毎年10月に行われ、その年東屋に出入りした職人、商人の方々を家族ぐるみでご招待して、東屋のハッピーを配る他、食事、菓子を配って東屋のお客様ともども、社交場としての一時を過ごしたものです。しかし、その時の思い出としては、早出しのミカンの酸っぱかったことだけが強い印象として残っています。

東屋は父欽一の意向と、時局の変化により昭和14年に廃業しましたが、翌15年いっぱいくらいは建物も一部残っており、徐々に取り壊したようでした。

その後、分譲や貸地として東屋の敷地には数十軒の住宅が立ち並び、既に入れ替わりも多くなっていますが、戦中、戦後にかけては、当家の横には細川護熙元首相の夫人になられた上田佳代子さんの、その隣には大女優の岩下志麻さんの家があり、海岸寄りには人間国宝第一号の清元栄寿郎さん、裏門の先には森繁久弥さんのご母堂が住んでおられました。

今では昔の様子を偲ばせるものは離れだった現江守邸、裏門の一部くらいになりましたが、関係者の皆様のご努力によって今回東屋の記念碑が建立されることは誠に有り難く、功労者ゑいに報いる最大の贈り物になると思います。

父長谷川欽一のことども

東屋廃業時の経営者だった父欽一は典型的なモダンボーイでした。運動神経抜群で、中学時代には野球、サッカーに興じ、高校では短距離でインターハイの記録をとったと聞きます。結婚後はテニスに凝り、東屋の庭の南面にテニスコート二面を作り、作家久米正雄さんらとテニスを楽しんでいました。

しかし、肩が弱いことからゴルフに転向し、ハンディ6で長い間頑張るほどの実力でした。

名門だった藤沢カンツリー（戦時中に軍に接収された）では大仏次郎さんや歌手の藤原義江さんらとご一緒でした。相模カンツリーで父を知る長老からは「欽ちゃんは典型的英国紳士だった」といわれますが、スポーツの他に音楽にも一家言があり、歌詞の聞きとれない歌い手などくそみそでした。

一方、ビリヤード、ダンスも一流で、戦後は自宅の子供部屋（12畳ほどでコルク張り）で慶応の学生さんを中心にダンスパーティが連夜のように催され、先生役でした（営業中は東屋敷地にダンスホールもありました）。

また、若い方々のサークル活動の場所として子供部屋や応接間を提供するなど父欽一のことを悪く言う人はいないといわれました。

従って、女性からも慕われましたが、母綾子は色白の楚々とした美女、戦後再婚した義母は元松竹女優の忍節子と二人の美女を妻として浮いた噂もなく、道楽といえはお洒落くらいでした。

家族でレストランなどにいった際に、さりげなくチップをウェイターやウェイトレスに渡す仕草は、真似ができないもので、まさにベレー帽姿のよく似合う明治生まれの伊達男としての生涯を全うした幸せな人でした。

最後に、父欽一が残した東屋としての功績といえ、時局の変化と、交通の便によりやがて訪れたであろう経営難を迎える前に、潔く惜しまれるうちに廃業したことだったと思います。



長谷川欽一氏フランス留学のさいの送別会。
中列左から2番目、後列左端が路可の母たか。（大正11年）

以下の文章は、昭和55年11月発行『くげぬま』(第7号)に、発表された「私の鵠沼」の再録である。

筆者の長谷川欽一氏はいうまでもなく旅館東屋の最後の経営者だった人。昭和60(1985)年6月、85歳で亡くなられている。欽一氏は、生前、東屋に関して語ることが極めて少なかったとされているが、ここに再録した文章は、東屋の歴史について欽一氏自身が直接触れたほとんど唯一のものと思われる。資料としても貴重なものであろう。

初出紙の『くげぬま』は、「鵠沼地区広報委員会」が発行していた新聞タイプの郷土研究紙だったようで、発行所の所在地は鵠沼公民館内となっている。現在は廃刊されている。

なお、欽一氏の文章では「東屋」が「東家」と書かれているが、そのまま表記した。また文中で東屋廃業の時期を「昭和13年」(正しくは昭和14年)としてあるが、これも掲載文のままとした。

昔の鵠沼族と同じく私も御多聞に漏れず移住族の一人です。然し明治三十四年数え年二歳の時、おやじが療養のため、東京から姉である「東家」を経営して居た長谷川栄を頼って鵠沼に移り住んで以来、もうそろそろ八十年になろうとしています。

東家の名が出て来たので、先ず東家の事から先に書くことにします。というのも、時々新聞その他で、鵠沼と云えばすぐ東家の名が出て来ますが、間違って伝えられている点が時々見受けられます。それは違うと口角泡を飛ばして抗議する程の事ではないと黙って来ましたが、私が書くとなると正確な事を書いて、次代へ残す義務があるように思います。

東家の創業は、何時であったのかは私の生まれる前の事なのではっきりしませんが、伊東将行氏と長谷川栄が力を合わせて経営し、発展させて行った事だけは事実です。

位置は、今の料亭東家より一本東側の八百屋(矢折)の道を入った突き当たりの東南側一帯(永井邸より海岸寄り)の五千余坪がそれでありました。

伊東将行氏は、もっぱら鵠沼開発の仕事に専念し、栄は東家を経営し、伊東氏

の仕事に後顧の憂いの無いように尽くしたのです。

東家の名義人は長谷川栄でしたが、栄が大正5年1月に急逝した際、伊東氏は栄の死後に伊東姓に入籍の手続きをとってしまいました。当然遺産相続の問題が伊東氏と長谷川一家との間に起こりました。栄には子供が無く栄名義の東家を継承する正当な嫡出子が居ないので、両者の間で相続の事での話し合いが続きます。

話は少し前に遡りますが、私の父は鵜沼に移住した翌三十五年六月に病没しましたが、父は長谷川家のたった一人の男児であり、あと九人は女ばかりであったので、私は数え年三歳で長谷川の家を継ぎ、なにがしかの財産を持って栄の家で養われる事になり、生母は里に帰り再婚しました。

その当時、鵜沼に来て栄の商売を手伝っていた長谷川の一族は、私に東家を継がせるべく伊東氏との話し合いが続き、やっと円満に私が東家の名義を相続する事になりました。その後の東家は、大正十二年の大震災迄は多少の「いきさつ」は有りましたが、順調に経過していきました。震災で東家の建物は全壊し、フランスに留学していた私も呼び戻され復興したのですが、その後営業に不向きの私は、昭和十三年東家を廃業致しました。その際には町内会の皆さんから鵜沼から東家が消えるのは淋しいと云われたものです。

戦後に入り、当時の鵜沼ホテルさんが、この地に「東家」の名を残すのだと、その名を使われるようになったと聞いております。

先頃の朝日新聞に、料亭東家の裏門であったかの如く、写真と記事が掲載されていましたが、これも誤りの一例で、これは私が復興した東家の残された遺物の一つです。

「私の鵜沼」でなく「私と東家」になってしまいましたが、夏の海岸での「夏の会」の催し、烏帽子岩や江の島への遠泳、船遊びの思い出等数限りが有りません。

大正十三年には、その当時としては数少ない硬球のテニスコートを二面、敷地の一角に造り、鎌倉（海浜）ホテルのコートと両方を使っての「鎌倉トーナメント」を開催、数多くのテニスの名士が出場され、私もその一員としてプレーした思い出、又昭和五、六年頃始めたゴルフに、人影まばらな砂浜で片瀬海岸までボールを打ちながらの練習で腕を磨いた事など思い出は尽きません。

しかし、紙面にも限りのある事とて心を残しつつ筆を擱きます。

将行の縁者として感謝

右近 ミサ

(敬右近一夫氏夫人、鵠沼在住)

思えば、もう五年ほど前になりますでしょうか、高三様が『鵠沼・東屋旅館物語』執筆にあたり、わが家に取材にいらしたのが始まりだったように思います。

歴史が好きだった夫は、幼少の一時期を祖母伊東ぬい（伊東将行の妻）のもとで過ごしたという経緯もあって、伊東将行のこと、東屋のことについては一入の思い入れがあったようです。夫の記憶にあること総てを高三様に聞いていただき、自分で調べた資料を見てくださいる方に恵まれたことは、夫にとっても幸いなことだったと存じます。結果的に、本の出版を見ることはできませんでしたが、夫なりに持っていた東屋への思いすべてを受け止めていただいたこと、もうそれだけで本望だったと想像いたします。本の出版に当たりまして、ご丁寧なお心遣いをいただきまして、残されたものといたしましてもこの上なく有り難いことでありました。

その上、このたびは、旅館「東屋」跡の記念碑を建立する運びとなりました由、ご報告をいただきまして、夫も事の成り行きに、お墓の下でさぞ驚き、またどんなに喜んでいるだろうと思います。

建立にあたって「鵠沼を語る会」の方々の熱意とご尽力は一方ならないことであつたろうと拝察いたし、深く深く感謝いたしております。

冊子『鵠沼』を読ませていただいておりますと、皆様の鵠沼に対する深い愛情、鵠沼の歴史を埋もれさせてはいけないという熱い思いが伝わってまいります。

小冊子ながら中身は非常に濃く、私どもの知らなかった鵠沼を再発見するような思いで読ませていただいております。そんな熱意の現れの一環として、記念碑建立という一つの形が実現いたしましたこと、心よりお祝い申し上げます。

藤沢市教育委員会の深いご理解とご協力に、また碑を建てる場所を提供して下さった永井様はじめ、ご協力下さいました方々に、将行の縁者の一人といたしまして心よりお礼を申し上げます。今後とも「鵠沼を語る会」の方々のご活躍をお祈り申し上げますとともに貴重な鵠沼の遺産が少しでも多く守られますよう心より願って止みません。

戦時下の東屋

佐伯 忠男（山口県田布施町在住）

『鵠沼』81号ありがとうございました。労作の「鵠沼海岸商店街」の復元地図など、たいへん懐かしく、当時を彷彿とさせられます。鵠沼書店、八百徳、有田商店など、よく覚えています。昔の「東屋」について、なにか記憶していることはないか、とのお問い合わせですが、思い出すままに書いてみます。

私は昭和17年10月に父が陸軍（経理）退役後、東京に本社がある軍需会社に勤めた関係で、樺太の豊原中学から湘南中学の2年生に転校、鵠沼の地に住むことになりました。中学校では長谷川欽一氏の長男滋君と同級でしたが、当時は彼が「東屋」の関係者であるとは知りませんでした。

小生が住んでいた借家は、たぶん会社が世話してくれたのだと思いますが、回りを池に囲まれていて、かつての「東屋の敷地内であった」とは聞いていましたが、戦争激化の折から確かめることもなく、そこで昭和20年7月に転居するまで暮らしました。敗戦間近に父が再び召集になって、私は母の実家がある山口県に戻りました。それ以来、鵠沼の地を訪れることもなく過ごしてきましたので、どのあたりに「東屋」があったのか知り得ませんでした。

一昨年、博文館新社出版の「鵠沼・東屋旅館物語」（高三啓輔著）を読む機会があって、その149 ページに「神奈川県高座郡藤沢町鵠沼六六四二番地」という地名をみて驚きました。それはまさに、わが家があった住所（昭和17年当時は藤沢市）です。いまでも手元にその宛名が書かれた封筒が残っています。

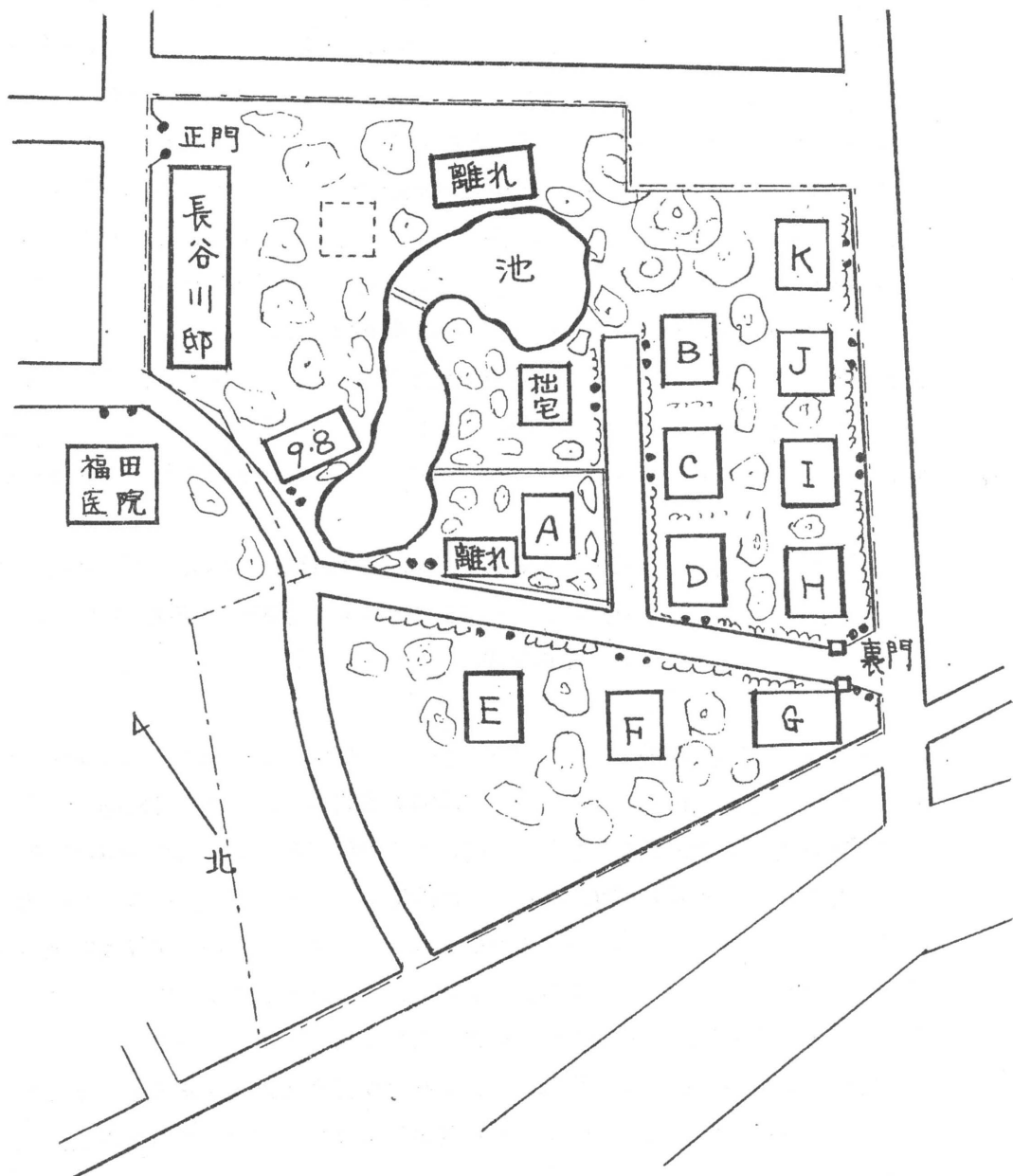
この本（以下「東屋物語」と略記）によれば、東屋が廃業した昭和14年の3年後に、その敷地内に住んだわけですが、私がいたのも3年足らずの短い期間でした。当時、池から西は長谷川家の所有で、わが家の敷地外でしたので、足を踏み入れたことはありませんでした。したがって十分なお答えが出来ないので残念ですが、かつての「東屋」の敷地内の様子を思い出して右に図示してみます。

私の家を含めてAからKまでの家屋は、年代の古さからみて、関東大震災後、そう時間を経ずに建てられたものと想像されます。E、Fより西にも家屋があったように思いますが、記憶が正確ではないので省略しました。

AからKまでの家屋は、新しさや規模の違いはありますが、どれも昭和初期にみられたような瀟洒で、個性的な造りが多かったように思います。E、F、Kの家は2階建てでした。

女優の岩下志麻さんがFの家に一時、お住いだったと後になって聞いたことがあり、そういえば彼女が幼少のころ、ときどき見掛けたようにも思います。また、古典芸能に関係した方もいらっしゃいました。多分Eの家だったと思います。

(編集部注＝長谷川祐氏の記憶によると、土地の所有権は長谷川家に残したまま廃業後、庭園の東半分を貸し、そこに松本松之助氏が貸家を建てたのではないかとのこと。また岩下志麻さんは戦後、長谷川邸の東に建てられた4軒の家の北側に住んでおられたという)



また池の南側の一部は、廃業のときに埋め立てられたのではないかと思います。「東屋物語」の写真（P. 87の下）の池は、埋め立て後のものと思いますが、その写真の「東屋本館二階から見た庭園」には、わが家の庭の一部が写っています。池の向こうに見える家は東屋の「離れ」で、芥川龍之介の「蜃気楼」を解説した写真などに「鵜沼東屋付近に残る茅葺きの家」として出ていました。

池はそれほど深くはなく、鯉や鮒がたくさんいました。同級生の船木義一君とよく釣りをして遊びました。庭には、あまり大きくない松や萩が生えていましたが、戦時中ということもあって、手入れは行き届いていなかったようです。

東屋の「別棟」（旧8・9号室）や、池の北側の「離れ」は、長谷川家の貸家として使われていたように思います。2軒とも似たような造りで「別棟」は木造総2階、「離れ」は平屋でした。南側に廊下があって、ガラス戸の外に手すりがついていました。明治・大正期の代表的な旅館の型式だったように思いました。「離れ」の西側にも木造平屋（図の点線）があったような気がしています。

また前述の茅葺きの「離れ」も当時は、Aの家を含めて貸家だったと思います。「東屋物語」の概略図（P. 77）の海側にある2軒の「離れ」については、小生の記憶には全くありません。道路や家屋を建設するため、取り去られたのではないのでしょうか。南側の道路のさきに長谷川欽一氏が建てた石造りのどっしりした裏門があり、いまでも記憶に新たです。わが家には、この南側の道路から入る私道が通じていました。

（編集部注＝「別棟」（旧8・9号室）は現在の杉沢邸、茅葺きの「離れ」は現在の江守邸だと思われる。この2軒と裏門の一部だけが、わずかに「東屋」の面影を残している）

私がいたのは敗戦の直前までですが、そのころになると、かつての「東屋」の敷地も戦場のような毎日でした。P51戦闘機の頭上をかすめる機銃掃射の音。B29爆撃機の邀迎戦で遙か上空から落ちてくる葉莢が屋根瓦に跳ね返る甲高い音。高射砲の破片が物凄い回転音とともに地面にめり込む音。夜はB29の通り道で、東京方面の空が赤く染まったのや、B29が炎上しながら相模湾に墜落していくのを何度か見ました。しかし、翌朝はいつも何事もなかったかのように、富士山が美しく朝日に輝いていたのを思い出します。

ご期待に添う内容にならず、また、おぼろげな記憶と独断を交えたことをお許しください。折をみて一度ゆっくり再訪してみたいと思っています。ではまた、よろしく。

草々

二つの新聞記事

東屋に関する二つの新聞記事を紹介しておきたい。

一つは 大正3年4月10日付『横浜貿易新報』の「鵠沼の大発展」という記事である。「家屋新築商家増す」という小見出しがついていて、東屋創業者伊東将行と旅館「あづま家」(東屋のこと)の名があげられ、「近時湘南に於ける避暑寒地として頭角を現し別荘の数次第に増加」などと書いてある。

もう一つは 昭和14年9月12日付『東京日々新聞』の東屋廃業を知らせる記事である。「突如廃業の声明」「鵠沼名物“文士宿”」という三段抜きの見出しがあって、最後の経営者・長谷川欽一氏の「かねて廃めようと思ってゐた」という談話が載っている。東屋隆盛の始めと終わりを告げる記事といってもよいだろう。

大正3年4月10日付

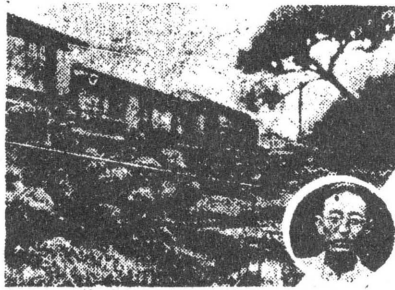
『横浜貿易新報』の記事

● 鵜沼の大發展

▲ 全國新築家屋の増加

藤澤町、鵜沼、鶴沼、二十餘年、前年までには、殆どたる砂原なきが、有志者伊東將行氏、其他の人々が、専心、實力の結果、近時、鵜沼に於ける、建築地として、頗る角を現はし、別荘の數、大に増加するのみならず、居住する者、多く、隨つて商業上の取引、亦多きを、加へ來りしを、以て、鵜沼、近は、本年に入り、新築家屋、非常、に増加し、いづれ、も、商業を爲す目的に、於て、一、し、町、の、体、格、を、爲すに、到り、し、は、移り、し、砂、原、を、い、く、べ、し、殊に、同、地、の、大、地、主、が、貴、族、同、人、に、子、弟、家、に、於、て、地、所、賣、與、與、等、に、付、き、解放、主、義、に、出、で、た、る、が、興、つ、て、土、地、の、砂、底、を、助、け、た、る、久、り、とい、ふ。

“宿士文”物名沼鵠



突如 廢業の聲明

亡命當時蔣介石也長期滯在

館主屋敷で、壁に懸架の品もまた、**源氏**
の版紙と夫人文子さんの御神札が、**舞臺**
前で結ばれたといふ深な十帖に、
よさしいエピソードもあり、この
各巻あづまの**懸架**は各方面か
ら非難に値してゐる。富主屋敷
谷川氏に**薩摩**の心得を教へば
これでサマシらしいから、私に
は懸架願ひは、一寸聞きで
すよ、かねて願ひでも思つて
ゐたので、古い懸架もあり各
方の人々から稱賛のものは指し
いなどといはれるので現在まで
來てしまつた次第、今後は家も
改題して大観と改題する。

昭和14年9月12日付

『東京日々新聞』の記事

- 明治20年7月11日 東海道線「藤沢停車場」開設。
- 20年(?) 三觜小三郎ら「^{こうしょう}鵠沼館」開業。伊東将行、同旅館に職を得る。
- 25年 伊東将行、独立して貸別荘風の「東屋」を開く。
- 30年(?) 本格的な「東屋」新築。長谷川ゑい、このころ経営に参加か。
- 30年秋 広津柳浪、東屋に滞在。小説「くされ縁」を書く。
- 30年前後(?) 井上大次郎、「対江館」(待潮館ともいう)開業か。
- 31年8月 「風俗画報」に壮大な「東屋」のイラスト載る。
- 31年夏 小泉八雲、東屋に3週間滞在。
- 33年10月23日 斎藤緑雨、東屋に滞在(～34年4月12日)「日記」を残す。
- 34年1月18日 与謝野鉄幹、東屋に緑雨を訪ねる。
- 2月10日 徳富蘆花、鵠沼に滞在して(～3月)東屋の緑雨を訪ねる。
- 34年夏 河合玉堂、対江館に来遊。「清風涼波」のスケッチを残す。
- 35年9月1日 江ノ電「鵠沼停車場」開設。
- 9月18日 高山樗牛、東屋に数日泊まる。
- 40年10月18日 武者小路実篤(～23日)、志賀直哉(～26日)と東屋に滞在して「白樺」発刊を相談。
- 41年5月23日 江見水蔭、川上眉山ら、硯友社の旅行会で東屋に来遊。
- 42年3月4日 実篤、東屋に滞在。のちに『お目出たき人』に作品化。
- 7月 里見弴、友人と東屋に泊まる。小品「七月」を書いて、7年後に『潮風』としてまとめる。
- 44年12月 谷崎潤一郎、東屋に滞在して「悪魔」を執筆。
- 45年6月1日 実篤、のちに妻となる房子と鵠沼に行き、鵠沼館で昼食をとる。
- 11月『世間知らず』として発表。
- 明治末期(?) 田中安・カネ、対江館を買い取り「中屋」と名を変えて営業。
- 大正元年10月20日 直哉、祖母・弟妹らと東屋に来遊。小品「鵠沼行」を書く。発表は5年後。
- 3年11月2日 小泉鉄、^{まがね}鵠沼に移住して「白樺」編集にあたる(～5年11月)。
- 12月末 実篤、東屋で越年。翌1月、佐藤別荘に移って(～9月)、戯曲『その妹』などを書く。友人の来訪多数。
- 6年2月22日 岸田劉生、鵠沼に移住、以後ときどき東屋で会食する。
- 5月 久保田万太郎、東屋に滞在して「末枯」を書く。
- 7年3月 潤一郎、東屋の離れに滞在(～9月)。佐藤春夫、芥川龍之介らしばしば訪れる。小説「金と銀」「小さな王国」などを書く。
- 9年2月末 武林無想庵、東屋に滞在(～3月末)。中平文子と知り合う。
- 9月1日 島田清次郎、中屋の離れに滞在(～10年1月)。『地上』第3部(10年1月発刊)を推敲。
- 秋 吉屋信子、中屋に滞在。

- 大正中期（？） 吉村鉄之助、鵠沼館を買い取り、数年後跡地に別荘を建てる。
- 大正9年12月9日 与謝野鉄幹・晶子夫妻、東屋に北原白秋、西村伊作らと泊まる。
- 10年4月 宇野浩二、東屋に数日滞在。江口渙、訪ねてくる。
- 夏 吉屋信子、中屋で東京朝日新聞に連載（7月10日～12月30日）の小説「海の極みまで」を書く。
- 9月中旬 大杉栄、東屋に滞在して『自叙伝』を書き始める。
- 秋 徳田秋声、東屋に滞在。吉屋信子、見舞に訪れた秋声の部屋で、大杉栄と会う。のち「私の見た人」を書く。
- 10月 浩二、東屋に10日余り滞在。『文学の三十年』に「東屋で私が顔を合はしたのは、里見弴、久米正雄、芥川龍之介、佐佐木茂索、それから、大杉栄などであった」と記す。
- 10月 江口渙、浩二を追って東屋にくる。
- 11月 佐藤春夫、東屋に滞在。『都会の憂鬱』を執筆か。
- 11月5日 大杉栄、東屋で「原敬暗殺」の号外を春夫に見せる。
- 11年2月下旬 芥川龍之介、鵠沼に行き（場所？）数日静養する。
- 11月6日 北村初雄、東屋で静養。12月2日死去。
- 12年9月1日 関東大震災。東屋・中屋・吉村別荘・劉生宅など多数倒壊。劉生は16日に鵠沼を去り、京都に移り住む。
- 13年 東屋・中屋、再建して営業する。
- 15年4月22日 龍之介、東屋に滞在（～5月25日）。「追憶」を発表し始める。
- 6月8日 龍之介、東屋に滞在（～6月下旬）。以後も断続的に来遊する。
- 7月上旬 龍之介、東屋に滞在。小品「鵠沼雑記」（没後発表）を書く。
- 7月27日 地元の富士山医師、東屋2階7号室の芥川を診察。
- 8月中旬 龍之介、近くの貸家「イー4号」に転居。「点鬼簿」を書く。
- 9月19日 堀辰雄、龍之介を見舞い一泊する。
- 9月25日 土屋文明、斎藤茂吉と龍之介を見舞う。
- 10月 龍之介、「イー4号」近くの2階家を借りて転居。
- 秋 鵠沼海岸で蟹気楼（逃げ水現象）が見られ、10月28日の東京朝日新聞で報道される。龍之介、小品「蟹気楼」を書く。
- 11月末 宇野浩二、龍之介を見舞う。「新年号の雑誌を三つ引き受けた」という。小説「悠々荘」「彼」「玄鶴山房」などを書く。
- 12月下旬 再び「イー4号」に戻る（～翌1月2日）。
- 昭和2年4月2日 龍之介、鵠沼から去る。7月24日自殺。
- 4年4月1日 小田急江ノ島線開通。「鵠沼海岸」駅開設。
- 8年 伊東将行の末娘政子、東屋に隣接して「鵠沼ホテル」を開く。ここに戦後、割烹旅館「東家」が営業、「東屋」と混同される。
- 11年3月初 川端康成、東屋（書簡では東家）に滞在。「花のワルツ」執筆。
- 14年9月11日 長谷川欽一、東屋を廃業。

（出典・小山文雄『個性きらめく』、高三啓輔『鵠沼・東屋旅館物語』
『藤沢市史』第6巻、会誌「鵠沼」各号ほか）

関東大震災直前の湘南の別荘地

県が初めて避暑客の実態を調査

“軍需成り金組”の進出目立つ

湘南湾岸の別荘地にはどんな階層の人々が来ているのか――。

関東大震災が発生する直前の大正12年7月、神奈川県が初めての試みとして、そんな実態調査を行っていた。むろん鵜沼も調査対象の別荘地の一つとしてとりあげられている。大正12年ごろの鵜沼といえば、旅館東屋には文人たちが最も足繁く訪れていた時期であり、その貸別荘群も隆盛を極めていた。

調査結果をまとめた記事が同年7月13日付の東京日々新聞相州版に掲載されていたので、鵜沼関係資料のひとつとして報告しておきたい。いうまでもなく関東大震災が発生したのは、この調査発表からほぼ一カ月半後のことだった。



神奈川県の調査は同月10日にまとめられたものらしい。

記事は相州版トップ扱いで、「時局下の避暑客人種」「筆頭はやはり実業家」という大見出しがおどり、小見出しに「軍需職工さん大進出」「中に皮肉・住宅難の受難者」とある。

調査対象となった避暑地は、鎌倉、逗子、葉山、鵜沼、平塚、大磯、小田原、箱根で、この年の夏、これらの場所で過ごした人々は計一万五千九百四十九人だった。その住まいは貸家、貸間が三千百四十一戸、新築家屋八百二十七戸。

職業別では「最も多いのは実業関係のもので、貸家六百十七戸（二九二六六）貸間四百三十室（一七七七人）、新築家屋八十四戸（二五五人）」、次いで「軍需産業関係の社員が位してゐる」と書いてある。さらに「有産階級の無職者」「社長重役級」「官公吏」「軍需工場の職工」の順で、「軍需工場の職工さんが肩を並べてゐるのも時局風景である」との解説がついている。

ただし「軍需工場の職工」さんで自家用別荘を所有している人はなくその数はゼロだった。これらの避暑地には「住宅難で押し出されて永住、半永住で住んでゐるものも相当多い」としてある。

典型的な名主屋敷

「大^お斎^お藤」家

伊藤 聖(会員)

榛葉 昭市(同)

川島 弘之(同)

今年(平成13年)1月2日、TBSテレビ「新春!途中下車の旅」という番組で「小田急沿線の気になるお宅」の一軒として、鵜沼本村(旧中井地区)にある「斎藤家」が放映された。

「歩くこと15分。まるでお城のような大きな門、この門は何でしょう」とナレーションが入り、長屋門を映し出す。その門の前で、レポーターの角盈男と森尾由美の会話。

角 大きな門だね。個人邸ではないでしょ?

森尾 ちがうでしょ?

角 (斎藤保夫の表札をみて) 個人邸だよ。個人邸!

森尾 すごーい。江戸村みたい。

二人 (こもごも) うーん。すごーい。

(ここで二人が玄関を開けると、斎藤保夫さん登場)。

<鎌倉時代に遡る斎藤家の歴史>

その長屋門をもつ斎藤家の歴史は、いまから 750年前に遡る。

昭和55年に復刻された加藤徳右衛門『藤沢郷土史』(原本は『現在の藤沢』昭和8年発行)は現在でも、郷土史研究の基本文献として引用される周知のものであるが、その「鵜沼の斎藤家」(P.610)を紹介する。擬古文で読みにくいので、句読点、ルビ、段落をつけて書き下してみる。

鵜沼の斎藤家の本家は斎藤保氏である。前代を正五郎と称し、その前代は代々六左衛門と称した。祖先は今を去ること七百年前の寛文年間、三河の斎藤一族が来住したもので、その墓標が現存していることから分かる。

そして当時、皇太神宮社(神明社ともいう)を中心にして南に当たり、民家としては同家がただ一軒だけであったため、同家を単に「南^{みなみ}」と称した。古い書類に「南六左衛門」と記してあるのは、そのためである。

「寛文」(1661-73)は江戸時代の年号であるから、ここは「寛元」(1243-47)の誤りであろう。いま話題の北条時宗のころである。

鎌倉時代には南のはずれだった斎藤家も、室町から江戸時代になると鵜沼村の行政の中心的存在になる。斎藤家は村の名主(村長)として代々「六左衛門」を世襲し、明治になるまで27代を数えたという。名主は年貢納入・戸籍管理・防火・土木工事から、村民の生活全般に責任をもち、またいろいろな相談にあずかった。江戸中期の享保年間(1716-36)の鵜沼村の年貢は300俵ほどだった(加藤『前掲書』P.713)という。

<名主として漁業の鑑札も発行>

当時、鵜沼村の大半は農家であったが、海が近くにあったため半農半漁の者も少なくなかった。したがって漁業権の管理も名主として斎藤家が行っていた。さきの『藤沢郷土史』は次のように続ける。

同家は代々名主役を勤められた。[中略]

安政年間の当主文吉氏(現代より五代前の六左衛門)は鵜沼新場(生魚の市場)の取締役を代官より命じられた。「文吉取締」の印章なき送状では、^{あらば}雑魚一尾たりとも輸出は出来ず、その権威はすこぶる大なるものがあつた。文吉氏の長男は江戸神田昌平塾に学び、すこぶる篤学の士で、名主としてもすこぶる著名のものであつた。

村民たちは斎藤家から鑑札をうけ、主として地引き網で魚を獲った。イワシ、サバ、アジなどが豊漁のときは、帰途は村のあちこちにある「稻荷社」に奉納した。斎藤家にも屋敷神としての稻荷社があり、右ページの地図にも、ほかに数か所の神社記号がみえる。いずれも稻荷社である。

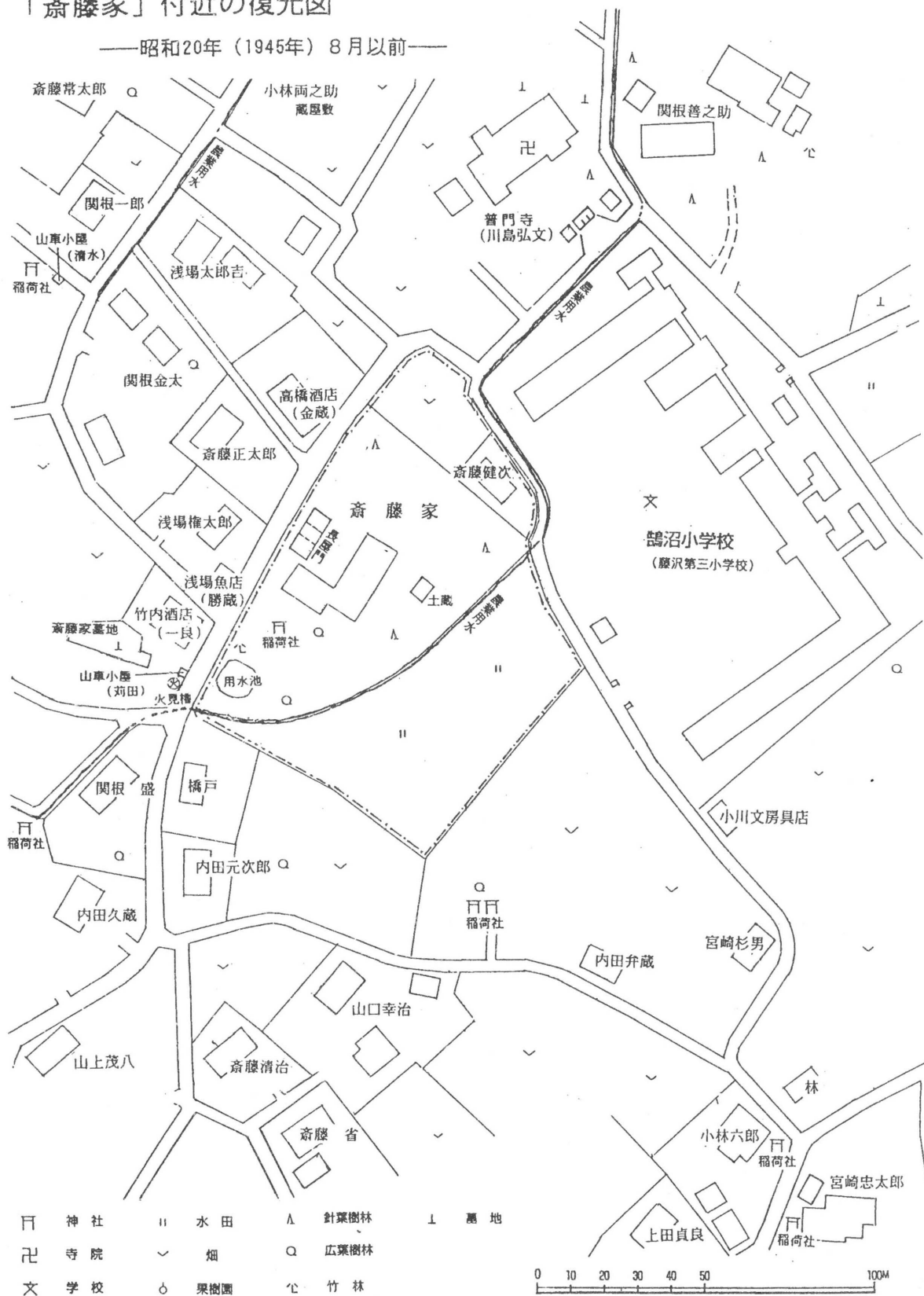
幕末になるとペリーの来航などがあって、のどかだった寒村にも風雲は急を告げる。さらに『藤沢郷土史』はいう。

嘉永六年、江川太郎左衛門英龍が若年寄の本多越中守に従って、武相総房の沿岸を巡視し、鵜沼海岸に鉄砲場(試験場たらん)を設けられるや、辻堂村より二人、鵜沼村より二人、見回役の選抜があり、名字帯刀を許された斎藤氏はその一人であり、当時の遺物として剣付き鉄砲数丁が同家に伝えられていたという。

嘉永6年(1853年)の翌年が安政(1854-60)であるから、この前後の記述は時間経過が逆になっている。見回役に任じられた斎藤氏は、前記の文吉を指しているものと思われる。

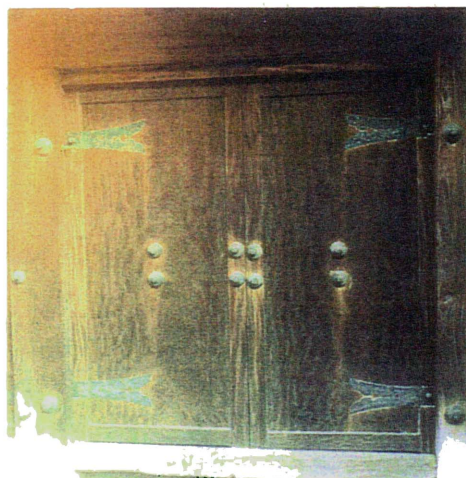
「斎藤家」付近の復元図

——昭和20年（1945年）8月以前——





道路側からみた長屋門の全景



表門の鉾と蝶番の飾り



長屋門の表側（門の左右が下男部屋）



屋敷内からみた長屋門の裏側

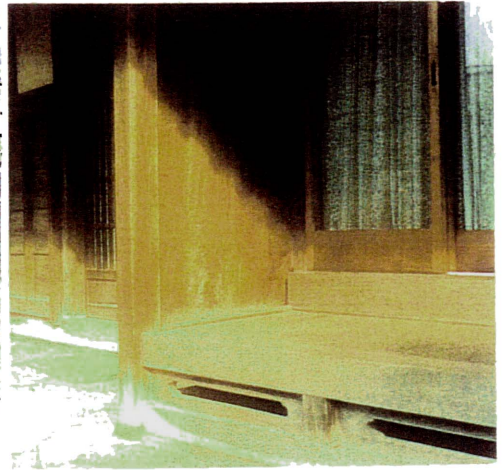
母屋の裏側、高い屋根と切妻がよく分かる
2階右に江戸時代の部（しとみ）が残っている





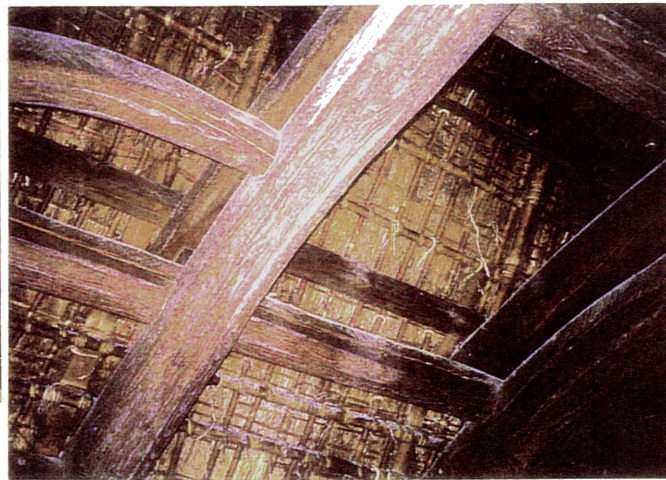
母屋の玄関、右側に「えんげ」がある

「えんげ」と縁の下飾り



欄間の透かし彫りと長押の釘隠し(左)

土間天井の「二重虹梁」と茅葺き内側



樹齢 750年の神木のケヤキと斎藤保夫氏



屋敷神としての稲荷社



<堂々とした格式のある長屋門>

斎藤家は往時の鵠沼村の主要道路に面していて、堂々とした格式のある長屋門を構えていた。所在地は「^{かりた}荻田3284番地」（現在は「本鵠沼 5-10-35」）、往時の敷地総面積は約3000坪（現在は1000余坪）。斎藤家の規模を示すために、戦前（昭和20年8月以前）の「村落地図」を復元して29ページに掲げた。

現在の当主は斎藤保夫氏（70）で、父は正夫氏（1901-1954）、祖父が『藤沢郷土史』に記されている斎藤保氏である。古い家系だけに分家の斎藤家も多く、それらの家と区別し、かつ名主であった斎藤本家に敬意を表して、昔から村人は「^{おお}大斎藤」と呼んできた。

斎藤家の長屋門はいまから約200年前、江戸中期に建てられ、藤沢市文化財になっている。ケヤキの門の左側には「くぐり」があって、特別なときでもなければ表門は開かれなかった。門扉には乳頭状の^{にゅうとう}鉾^{びょう}が8個、くぐりに2個、柱に6個ついていて、名主の威厳を示している。また蝶番の飾りも珍しい形をしている。

屋根はもともと茅で葺いてあったが、戦後、大量の茅の入手が困難となって、昭和50年ごろ保護のため、母屋（本屋）と一緒にレジノ鈑で覆いをかぶせた。

このような長屋門は江戸時代の大名屋敷や名主屋敷にみられ、それぞれ格式によって大きさや構造が決まっていた。大名の長屋門では、左右の長屋に下級家臣を住まわせ、表門の警固に当たらせた。斎藤家では、^{ひさし}庇のついた10畳と、張り出した8畳（これは現在取り除かれている）の部屋がそれぞれ門の左右にあって、下働きの男たちの住いになっていた。多いときで15人ほどの下男がいた。また別に下女が7、8人いたという。

<母屋は六間取りの田の字型>

長屋門から方形の踏み石を伝って、2階建て、間口8.5間（15.3m）、奥行き4間（7.2m）の母屋の玄関に至る。いまはガラスの入った引き戸になっているが、本来は板戸だったのであろう。外からみると玄関の右に、ちょっと広い縁側（3.5×0.9m）がついている。資格のある者しかここからは上がれなかった。ここで帯刀を外して部屋に入った。「刀を横たえないで、縦に置けるように奥行を広くとってあった」そうだ。

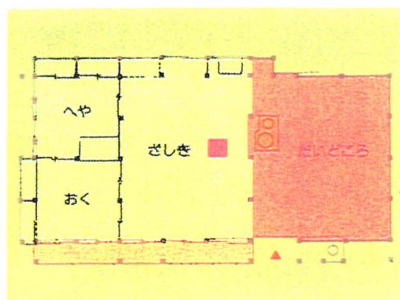
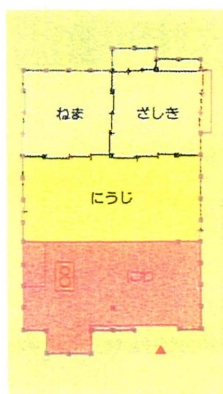
この広い縁側は、玉川哲雄（千葉大助教授）の「農家の間取りと村共同体」によると「^{せったん}摂丹型」（右ページ図④）、「^{みまど}前座敷三間取り」（図⑤）、「北山型」（図⑥）など関西に多く、広縁・座敷という格式空間を前面に押し出す「中近世の名主・地侍層の住居の系譜を引く形式」であるという。

関西では「えんげ」と呼ばれているようで、柳田国男は「長野市付近では是をエンサ又はエンノ、大和の吉野郡はエンニ、十津川から熊野にかけてはエンノ、丹波多紀郡ではエンナ、播州ではエンゲ、其他の地方も概ねエンバナ・エンガワである」という。要するに「縁側」のことである。関東では何と呼ばれているのか、斎藤家では特別な呼び名はないという。便宜上、34ページの図では「えんげ」としておいた。

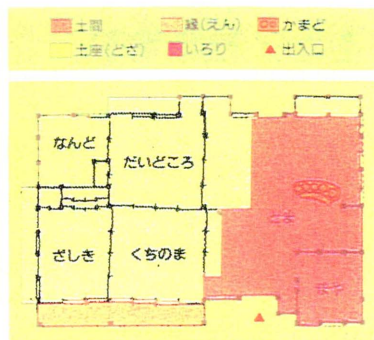
典型的な農家の造りは「田の字型」が基本で、前記の玉川哲雄によると、これはちょうど「田」の字のように四つの部屋が並ぶものをいい、民俗研究者の間では「整形^{よまど}四間取り」（図①）と呼ばれているという。柳田国男は「四間^{よまど}通り」と呼んでいる。

斎藤家の場合は、この「田の字型」を拡張して、8畳の座敷を「六間取り」にした形式である。もともと田の字型の大きな特徴は、床の間のある書院造風の奥座敷を中心に、続き座敷が取れることである。斎藤家では名主としての職務上、拡張性のある六間取りを必要としたのであろう。

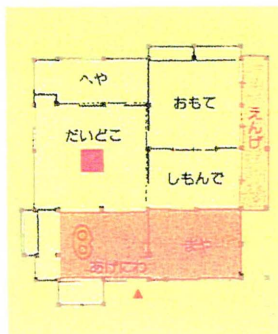
この続き座敷で、人を集める婚礼や葬式は勿論のこと、村の重要な決定をする「寄り合い」がもたれた。いわば、村議会場としての六間取りだったのである。この六間取りこそが、名主「大斎藤」の象徴だったといえよう。



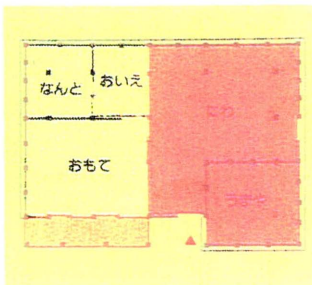
②北村家(旧所在地神奈川県横浜市・貞享4年=1687)・広間型三間取り
③宮地家(滋賀県蒲生郡・宝暦4年=1754)・伊香型(余呉型)



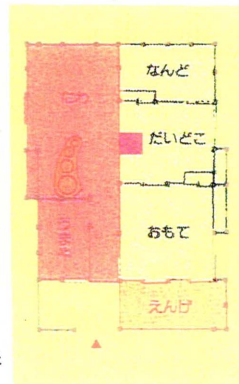
①山本家(大阪府河内長野市・17世紀末)・整形四間取り



⑥石田家(京都府北桑田郡・慶安3年=1650)・北山型



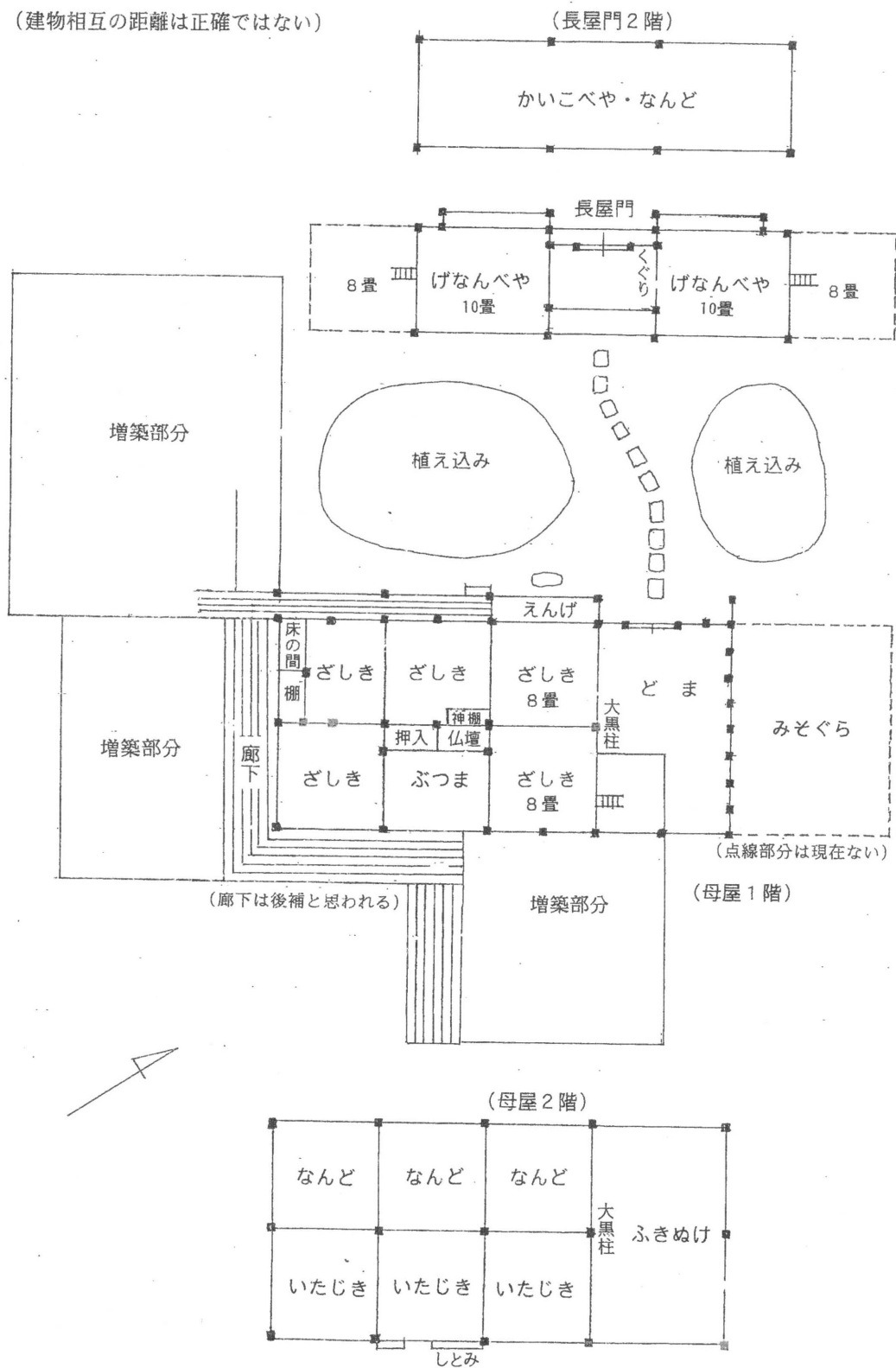
⑤箱木家(兵庫県神戸市・15世紀)・前座敷三間取り



④泉家(旧所在地大阪府能勢郡・17世紀後半)・摂丹型

「斎藤家」屋敷内の配置（間取り）図

（建物相互の距離は正確ではない）



<風雪に耐えた見事な木造建築>

「えんげ」のついた座敷と土間を区切る位置にケヤキの「大黒柱」がある。柱が支えている梁は二重になっていて反りをもち、いわゆる「二重虹梁」になっている。これは屋根を高くするための構造上の配慮であろう。大黒柱の太さは1尺2寸角(36×36cm)、梁も同じくらいの太さのケヤキで、手斧の跡が残る。

柱と梁は「ほぞ」によって、がっしりと組まれ、釘は1本も使っていない。垂木も桁に縄止めされていて、その上に茅が葺かれている。20畳ほどの土間は2階まで吹き抜けになっているため、茅が葺かれている天井までは、優に5メートルある。見事な木造建築である。

茅葺き屋根は60年くらいしか保たないので、屋根を半分ずつ、30年ごとに葺き替えた。かつては大船や奥田付近に同家の茅場があって、数年分の茅を刈り集め、屋根を葺いたものだという。それらの山も開発されて茅場がなくなり、斎藤家をはじめ鵜沼から茅葺きの農家は消えてしまった。

同家で最後に茅を葺き替えたのは昭和23年ごろだった。そのときはトラックで50台分、約5000束の茅が使われたという。それからしばらくは、傷んだ個所の茅だけを取り替えたりしていたが、それも出来なくなって、レジノ飯で覆いをして現在に及んでいる。

<防風林の奥に屋敷神の稻荷社>

母屋の南側には斎藤家が、この地に居を構えたときからあると伝えられる樹齢750年余のケヤキがあって、ご神木になっている。直径は2メートルほど、子ども6人抱えの太さである。また、その傍らに、クスノキ、タブ、カシ、クルミ、マツ、ヒノキ、タケなどの防風林に囲まれた「稻荷社」が祭られている。

柳田国男も指摘しているように、稻荷を屋敷神とする風習は広く全国的に行き渡っているが、とりわけ鵜沼は昔から稻荷信仰の盛んな土地であった。現在でも本村を歩くと、屋敷神として稻荷社を祭っている農家を目にすることができる。豊漁のイワシやアジの代りに、いまは油揚げが供えられていることだろう。

注1) 玉川哲雄「農家の間取りと村共同体」は朝日百科『日本の歴史』近世Ⅱ 8-82から引用。33ページの図も同書による。

注2) エンゲは『柳田国男集』19巻 P.165、四間通りは2巻 P.217、屋敷神としての稻荷社は13巻 P.357に出ている。

講演「なぎさクラブ」の思い出

高木千恵子

(「鵜沼を語る会」前会長高木和男氏夫人)

高木でございます。

戦後すぐ、鵜沼にございました「なぎさクラブ」のことについてお話しいたします。私も86歳になりまして、記憶もいたって悪くなっておりまして、しどろもどろと思いますがどうかお許してください。

◆クラブ誕生のいきさつ

「なぎさクラブ」といいますのは、昭和21年から23年ころまでの会でございます。

そもそもの成り立ちのいちばん初めっからお話しいたしますと、戦争が済んだ21年、荒井英郎さんが私どもの家へ見えられました。この方は日本ニュース映画社（私どもは日映、日映といっていました）にお勤めになっておられて、素晴らしい記録映画などを撮っていられた方なんです。

で、荒井さんはもう戦争も済んで、みんな文化に飢えている、この鵜沼海岸には文化人がいろいろ住んでいるから、その方たちに指導者になっていただいて、なにか文化活動をしませんか、とそういう話をもって来られたんです。この話には夫の和男も賛同いたしまして、それから毎晩のように私の家に集まってどういうふうに活動していこうかなど具体的な話し合いをいたしました。

その時に集まった顔触れは、荒井英郎・なみ子ご夫婦、芥川龍之介の甥になれる葛巻義敏・万里子ご夫婦、それから私の家に住んでいらした坂崎武彦さん（この方も日本ニュース映画社社員でした）などでした。

荒井さんがおっしゃった文化人のお一人は、近所にお住まいの森幹雄さんという方でした。もう早くにお亡くなりになりましたが松竹大船の美術部にいらした方なんです。またその弟さんで、どこかの劇団にいらした方で、この方も熱心な方でした。それから岩下潔さん。新協劇団にいらした方で芸名は野々村潔、いまの岩下志麻さんのお父さんです。そのころ志麻ちゃんは白百合幼稚園に通っていましたが、しっかりしたお子さんのようでした。

ちょっと話がそれますが、岩下さんのお隣が上田さんのお宅で、そこには三人のお嬢さんがいました。真ん中のお嬢さんが志麻ちゃんと同級で、その下のお嬢

さんが元総理大臣を務めた細川護熙さんの奥さんになられた方です。ですから女の子のお子さん二人が家を並べて有名人になったわけです。

野々村さんの弟さんで俳優座の俳優さんだった峰岸四郎さん、この方は早くに亡くなりました。それから芥川比呂志、多加志さん。お二人は葛巻さんと従兄弟同士で、いっしょに住んでいらっしゃいました。鵜沼公民館の近くですね。それから大曲（おおまがり）に住んでいらっしゃった声楽家の井崎加代子さん。こうした方たちは覚えています、あとはどんな方がいらしたか、すっかり忘れてしまいました。荒井さんがこの方たちに、指導者になってくださるようお願いしたんです。

それで会の名前をどうしようということになったのですが、皆さんにもおっしゃらないのです。その時、私がふと思ったのですが、ここは海岸に近いから「なぎさクラブ」という名前にしたらどうでしょうねっていったんです。すると皆さん同意して下さって、それで名前が付いたんです。

◆六つの部で活動

そのころ「なぎさクラブ」に入って演劇に大変に熱心な方で斎藤梅子さん（編集者注 現姓久松、川崎在住）という方がいらっしゃいました。鵜沼商店街にあった食堂「鵜楽」の娘さんです。その斎藤さんが「なぎさクラブ」の思い出を『私の大学なぎさクラブ』という文章にまとめられました。その文章は、私の夫の著書『鵜沼海岸百年の歴史』に収められております。昔のことを大変によく覚えていらして、感心いたします。

「なぎさクラブ」の会長がだれだったのか、会長という名の付く人はいなかったような気がします。会費をとったのか、記録も名簿もないんです。そのころの方もだいたいお亡くなりになったり、東京のほうへ移ってしまわれたり、ほとんど分からないんです。

「なぎさクラブ」には演劇部、人形劇部、音楽部、文芸部、美術部、ダンス部がありました。

斎藤梅子さんのお書きになったものを参考に申し上げますと、演劇部のリーダーが野々村さん、峰岸さん、芥川比呂志さん、音楽部のリーダーが井崎加代子さんでした。音楽部は東屋でコーラスの練習をしたり、レコード鑑賞などをなさったそうです。レコード鑑賞ではウェーバーの『舞踏への勧誘』を聴き、その解説の鮮やかだったことなどを、梅子さんは書いておられます。

文芸部のリーダーは葛巻さん、芥川さんで、アランの『幸福論』などを読んだそうです。

演劇部では斎藤さんなんかずいぶん劇をなさいました。人形劇部、これはリーダーは荒井さんでした。あとでお話しますが、私はこの人形劇部に入っていました。

美術部のリーダーは荒井さんの奥さんのなみ子さんと森幹雄さん。またダンス部のリーダーは葛巻さんの奥さんの万里子さんでした。

演劇部の方々は、私の家でもずいぶん練習をなさいましたが、その内容はもうすっかり忘れてしまいました。

22年に演劇部の方たちが湘南学園の講堂で、一般の方々に見に来ていただいて公演をしたことがあるんです。その時の出し物は岸田国士の『葉桜』でした。母親役を演じた荒井さんの奥さんのなみ子さんは、娘さんのころ松竹の女優さんだったそうですが、やはりとてもお上手でした。あとの配役はどなただったのか、もう覚えていません。この時はチェホフの『結婚申し込み』もいたしました。



前より284回 和服の女性が高木千恵子さん。二列目中央の

和服の男性が東屋主人長谷川欽一氏(1947年1月撮影)

これは斎藤梅子さんが主役でもって本当にお上手でした。

「なぎさクラブ」にはどんな方がお入りになったかという、今のようにポスターを張ってというそういうことはなく、やっぱりクチコミで入っていました。

参加者もふえてまいました。

さきほども申した

私の夫の著書『鵠沼海岸百年の歴史』に、「なぎさクラブ」の新年会の写真(社)が載っていますが、それをみますと斎藤梅子さんやら葛巻さんご夫妻、荒井さんご夫妻、私ども夫婦、近くにあった郵便局の娘さん、東屋のご夫妻、それに娘さ

んの真弓さん、鵜沼海岸駅前の本屋さん「鵜沼書店」の亡くなられたご主人の福地さん、坂崎さん、駅前にあった不動産屋さんの息子さんの内田さん、斎藤さんというお家の息子さんなど、そんな方たちが写っておられます。

◆ 娯楽増え自然消滅

「なぎさクラブ」のメンバーには、私たちが「ムセン、ムセン」と言っていた逋信省中央無線電信講習所藤沢支部の生徒さんたちも入っていました。ムセンは現在の電気通信大学の前身ですが、学校は辻堂寄りの海岸にありました。斎藤梅子さんが勧誘されたのではないかと思います。演劇部は23年にももう一度公演なさったそうですが、その時は湘南学園ではなくムセンの講堂だったそうです。

私は人形劇部に加わっていました。葉山又三郎さんから堀川の夏祭りに「なぎさクラブ」からなにか出して欲しいといわれて、野々村さんとご一緒に人形劇を出すことになりました。美術部の森さんに教えていただいて、人形のカシラ（頭）を私の家で作りました（編集者注、『鵜沼海岸百年の歴史』には、新聞紙をほごし糊を混せてドロドロにこねて造ったとある）。カシラに竹の筒を刺して、着物は私の着物の余りかなんかで作りました。この人形は最近まで残っていたのですが、捨ててしまったらしくもったいないことをしたと思っています。

劇は『水争い』というものでした。農民が水枯れるとき水を争ったという劇だったと思うんです。農家の庭に舞台をつくってやりました。竹の筒に指を入れて、体を舞台に作った台の下に隠してやるのですが、野々村さんはさぞおかしかったことだと思うんです。私は学校時代に対話（当時は劇のことをそう呼んでいました）をちょっとしたことがあるだけで、それが有名な俳優さんと二人でやっているんですから。

そのうちに文化人のリーダーの方々も東京へ引き上げて行かれるようになりました。生徒である私たちもあきてしまったのでしょうか、他にも娯楽がでてきたのか、「なぎさクラブ」は自然消滅になってしまったみたいです。私が覚えているのはこのくらいなんです、でも一時はみんな張り切って、喜んでやっていたんです。

（この講演は平成12年12月19日、語る会の12月例会で行われた。）

鵠沼時代の高橋元吉

伊藤 聖（会員）

八木重吉、萩原朔太郎、萩原恭次郎らとともに群馬を代表する詩人、高橋元吉^{もときち}（1893-1965、敬称略）は、最晩年の1年4ヵ月を縁つづきの倉田健次方（鵠沼松が岡2-9-15）の仮寓で過ごした。江ノ電「鵠沼」駅から海岸通りを海のほうへ歩いて10分ほどの、かつて藤ヶ谷橋があったところである。この辺りは昔の鵠沼の面影がいまでも残っているが、元吉がここに居を移した昭和38年（1963年）当時は、東京オリンピックの喧騒の波も及んでは来ず、閑静な住宅地だった。

元吉は72歳で亡くなるまで詩作への意欲を失わず、この鵠沼時代にも「毎日毎日見てゐて」「空間といふ空間が」など数々の秀作を残している。現在も近くにお住まいの山本佐知さん（元吉の二女）は「倉田の家の右斜め前に菊本さんのお屋敷（旧菊本別荘）があって、いまは大分数が少なくなりましたが、大きな松林がありました。父は脚が不自由になってからは外出を控えていましたから、2階の椅子に座って、その松林を眺めるのが好きでした」という。

「毎日毎日見てゐて」

毎日毎日見てゐて毎日毎日

感心してゐる

松の木のあの松の木の枝

あの松の木の枝の向ふの松の木の枝

そのまた向ふの松の木の枝

上に見え下に見え

なん本もなん本も

横並びに並んでゐる松の枝

葉の間に見え隠れしながら

風がくるとゆさゆさと揺れるほど

ごつごつしながらしなやかな

太すぎもせず細すぎもしない松の枝

枝を揃えて立ち並ぶ松の木

（『高橋元吉詩集』第5巻 304ページ）

だれにも分かる平明な詩である。つぶやくようなモノローグは元吉の詩の一つの特徴であった。言葉がぎりぎりのところで「詩」にとどまっているとでもいえようか。「松の木の枝」という言葉を繰り返し繰り返し積み重ねながら、詩は松の木の高みに上っていく。そこに、すっかり松の枝に入り込んで、自然と一体になった元吉がいる。世俗を超越した、澄んだ詩境がうかがわれる詩である。

「松の木の多いところだ」

松の木の多いところだ

どの窓をあけても松の木の梢が見える

夕がたの空のひかりを少し波立たせながら

梢の葉の繁みが揺れてゐたりする

(同 294ページ)

「むかふの松の枝が」

むかふの松の枝がゆれてゐるのは

風のせゐなんだらう

風はどこかを吹いてゐて

吹かれてゐる人は涼しいとおもつてゐるだらう

あの鳥のこゑも

ぼつとすると雨をよんでゐるのかもしれない

(同 310ページ)



元吉が眺めていた鵜沼の松林（松が岡二丁目で山本昌弘氏撮影）

松の枝を揺らして通り過ぎる「風」、それは1キロほど先の海から潮風を運んでくる風だ。ここにあげた3編の詩に「松の枝」、「揺れて」が出てくるのは偶然ではない。松の枝ぶりをみているのではなく、枝を動かす海の風をみているのである。

群馬の山並みに囲まれて育った元吉は、海をみるのが好きだったという。歩行が不自由になってからは、それも思うにまかせなかったから、娘の佐知さんを通して海の様子を聞いた。佐知さんは語る。

「当時、私は鎌倉にいましたから、江ノ電で私が訪ねていくと、きょうの海はどうだったかと必ず聞くのです。どうかといわれても、そう変わったことをいうこともできません。きょうは何と答えようかといつも頭を悩ませていました」。

元吉は松の木の枝が揺れ動くのをみては、その先に海をみていたに違いない。風は海からの使者であった。穏やかな枝の動きは静かな海であり、激しい動きは荒れる海であった。これらの詩のほかにも「立ち並ぶ松林の」(末尾に引用する)など、元吉は繰り返し繰り返し、松林の風をうたっている。

萩原朔太郎らと交遊

高橋元吉は明治26年(1893年)3月、前橋市で生まれた。同38年に県立前橋中学に入学、萩原朔太郎は7歳年上であるが、同じ中学の4年に在学していた。朔太郎は翌39年に卒業している。明治43年、元吉は前橋中学を卒業、第一高等学校に進学を希望していたが、父の指示で兄を助けて家業の本屋「^{かんこう}煥乎堂」に勤め、のちに兄が亡くなってからは経営を引き継ぐことになる。向学の望みを絶たれた挫折感は深かった。沈鬱な心を詩作に向けていったのは、ある意味では必然的なものであった。大正5年(1916年)倉田菊江と結婚、晩年に身を寄せた倉田健次は妻の実兄である。

大正11年10月、第一詩集『遠望』を出版した。しかし、その一ヵ月前に菊江は愛児二人を残して死去、哀惜の気持は翌12年5月発行の第二詩集『耽視』に収められた「傷心八十九章」に結実した。高村光太郎の『智恵子抄』とともに、愛妻を悼んだ近代詩の絶唱といえよう。同年10月、そのころ知りあった高田博厚、尾崎喜八らとともに同人誌『大街道』を発行、また同年12月には五十嵐愛子と再婚した。

大正から昭和にかけて、元吉は萩原朔太郎、高田博厚、尾崎喜八、吉野秀雄、倉田百三らと交遊して、旺盛な詩作をつづけたが、またも家庭的な不幸に見舞われる。昭和5年、二男^{やろつ}耶律が四歳で亡くなったのである。翌6年2月出版の第三詩集『耶律』には、集中の白眉「かりんの花」が収められている。

「かりんの花」

かりんといふ木は
春なかば 青葉のかけに花をつけるのであつた
一つづつあちこちに點在する
ひそやかなうすくれなるの花であつた
勤めへのゆきかへり
いく日かそのあはれさを愛でたのであつた

不意に愛児耶律に死なれた
旬日ののち
ふたゝびその木の下を過ぎた
花はすでに散りはて
唯青葉の 無限の寂けさを包んでゐるのであつた

(『高橋元吉詩集』第3巻 172ページ)

高田博厚との出会い

昭和6年(1931年)3月、東京・新宿の中村屋で詩集『耶律』の出版記念の会が、高田博厚ら友人たちの手で開かれ、高村光太郎、倉田百三、谷川徹三、吉野秀雄、古谷綱武、藤原定ら14、5人が出席した。この直後、博厚はフランスへ旅立ち、第2次大戦をはさんでの26年間、日本の土を踏むことはなかった。

元吉が高田博厚と初めて会ったのは、愛子の勤める前橋共愛女学校の記念講演に博厚が訪れたときであった。愛子の紹介で博厚と対面した元吉は、自分と同じ芸術の美神に仕える同志を直感した。それは終生の友との出会いであった。元吉の姉の娘、通乃^{みちの}さん(のちに元吉の長男徹氏と結婚)は、最も元吉の身近にいた人だが、雑誌『同時代』(第二次)39号に次のように書いている。

会っていきなりじかにわかる人間というものがある。魂の質が同じなのだ。
高橋とは、はじめて会うような気がしなかったと、後で高田先生も書いている。

元吉はフランスへ行く博厚のために色紙を書いた。

思ひわび

けふもみあげる

雲のなかのいちばん高い雲

『耶律』のなかの博厚の好きな詩であった。この色紙は高田がパリにいる間、

アパートの壁にずっと掛かっていて、四半世紀後、博厚とともに帰国した。また、このとき一緒にもって帰ったなかに『黄裳詩鈔』という40ページほどの薄い和綴の詩集があった。「高田は佛蘭西に行つてゐる。こんなものでも送つてやつたら多少は旅情の慰めともなうか。（あとがき）」と博厚を追い掛けてきた詩集であった。パリの高田は、色紙と詩集をみて、いつも元吉を身近に感じていた。

フランスに渡った高田博厚は、すでにその地にあった片山敏彦の紹介でロマン・ロラン、アラン、ヴィルドラック、マルティネらと知り合い、それらの人々をモデルに肖像を作り始める。さらに「マルティネ夫人」「ロラン夫人」「ガンジー」「シニャック」「レミー」などを次々に制作していく。

昭和8年（1933年）には、その20年前にマルヌ川に投身自殺した憂国の詩人レオン・ドゥベルの像を作る。この像はのちにパリ近郊のマルヌ川畔と、詩人の生地ベルフォールに記念像として建立された。マルヌ川畔のものは、戦後取り去られて所在が分からなかったが、高田博厚に師事した彫刻家、沖村正康氏が尋ね出して、この像を複製してもらい、平成12年（2000年）に元吉ゆかりの「煥乎堂」で開かれた「生誕100年記念 高田博厚彫刻展」で日本初公開された。

昭和32年（1957年）10月、博厚の帰国を東京駅に出迎えた元吉は「高田はちっとも変わらないな」という印象を受けた。博厚も「みんな白髪になったが、変わらないものは変わらない」と思った。博厚は東京・西落合にアトリエを借りて、制作を再開した。元吉は上京してその仮寓に泊まり、昔のようにいつまでも語りあった。アトリエの壁には、日に焼けたあの色紙が掛かっていた。博厚はのちに『本の手帖』43号（元吉追悼号）にこう記す。

「三十年のあいだに、こんなにも陽焼けしてしまったなあ……」。壁の額を見上げている二人の眼には涙がにじみ出た。

吉野秀雄に勧められて

高田博厚が帰国した翌33年の暮れ、元吉は脳血栓で倒れた。前橋の厳しい寒さが病気に影響することを心配した吉野秀雄は、暖かい鎌倉に転地して療養するように勧めた。鎌倉には二人の共通の友人も少なくなかった。鎌倉での生活は吉野の「高橋元吉さんの晩年」（『風雷』4号「高橋元吉追悼号」）に詳しいというが、私はみていないので、関俊治・梁瀬和男制作の「年譜」から吉野の文章を孫引きする。

高橋さんは床の上にもいることもあり、床のわきに坐っていることもあったが、枕べの机には時計や寒暖計や気圧計や、何かこまごましたものを置き、また海浜から拾ってきた貝がらや小石をたくさんならべてよろこんでいた。……わた

しのためにウィスキーやビールを買ってあることもあり、わたしはいい気になって、長い時間おしゃべりした。……診療をうけにくるかたがたわたしのところに寄ってくれることもあった。またうちの近所の八幡前で、壺屋という骨董屋や鳥居屋という民芸を売る店にも好んで寄るらしかった。……

鎌倉では3回市内を移転した。最初は鎌倉ホテルに3ヵ月ほど居を構え、ついで坂之下92番地・村田義雄方に3ヵ月、そのあと材木座1番地・田中久吉方に移り4年4ヵ月、ここが最も長かった。借家については、吉野が懇意にしていた鎌倉駅前の島森書店主の島森慎一郎が世話したという。同じ書店経営者として気が合うところもあったに違いない。

当初は吉野の文章にもあるように、まだ歩行に不自由を感じていなかったもので、好きな海辺を散歩して、貝殻や小石などを拾ってきたりした。昭和35年春に材木座海岸の砂浜で、腕を組んで遠くを見つめている写真（上掲、高橋徹氏撮影）が残されている。



元吉が前橋を出て湘南の地に移り住んだ6年2ヵ月間に作った詩は、通乃さんが編集した『高橋元吉詩集』の第5巻に154編・1202行が収められている。そのうち鎌倉での詩が132編・1044行で、繰り返し「海」がうたわれている。これは残りの鵠沼での詩22編・158行のなかで「松林」が何度も取りあげられているのと、著しい対照をなしている。鵠沼では、もはや元吉の健康状態は海を見に行くことを許さなかった。最後にもう一つ、松林の詩をあげておこう。これはあまり普通の詩人がうたわない「松の花」に目をとめた小品である。

「立ち並ぶ松林の」

立ち並ぶ松林の松の枝が
それぞれ いつぱい
きれいに花をつけた
大きく風に揺れてゐる
時々 雀がきたり
鳥がきたりもする

（『高橋元吉詩集』第5巻 303ページ）

皇后陛下の読書の思い出と 「疎開地・くげぬま」

番場 定孝（会員・神奈川県議会議員）

平成十年秋は、四十三年ぶりに二巡目の国体が開催され、神奈川県は、天皇杯、皇后杯共に獲得しました。この年、私は県議会議長在任中で、知事と共に国体に臨まれる皇族方の随従を務めることになりました。

十月二十四日、天皇皇后両陛下を開会式にお迎えする前段、市内のホテルでのご昼食に私も同席する幸運を賜りました。お食事後、立食式のパーティーが用意されており、二つのグループに分けられました。天皇陛下のグループには知事、私は四、五人の皆さんと皇后陛下を囲むグループに入り、それぞれカップを片手に談笑が始まりました。ちょうどその頃テレビ放映された「皇后陛下の子ども時代の読書の思い出」が話題となりました。私もこの放映を拝見し、お話の中の「海辺の町」はおそらく鶴沼と拝察しておりましたが、直接のお言葉を賜れば誠に幸甚なことと思いました。

——皇后様は先のテレビで、海辺の町に疎開されたとお伺いしました。その町は藤沢でしょうか。

「鶴沼ですよ。終戦前の小学校四年生から五年生の数ヶ月疎開していました。乃木女学校、今の白百合に通っていました。」

——鶴沼では何かよい思い出がありますか。海岸などへは散歩にいかれましたか。

「二つのことを憶えております。戦争中であまり外には出られませんでした。でも、一度だけ同級生の女の子と海に行ったのです。そこで海軍の二人の兵隊さんに出会い、いろいろな話をさせていただきました。もう一つは海岸の手前に自動車道路があり、そこで『逃げ水』といいます

か、蜃気楼を見たのを憶えております。」

——それは鵜沼のすばらしい光景です。鵜沼に逗留していました芥川も短編ですが『蜃気楼』を著しております。

「そうですか。懐かしい土地です、鵜沼は……。逃げ水を追っていました」

そのときの少女と何年か前に偶然再会され、またお付き合いが始まったとのこと言葉に、ほんのひと時、少女時代と鵜沼を偲ばれている様子でした。

お話は更に続けられ、読書の思い出の中から相模の国の海に弟橘比売が倭建命やまとたけるのみことのために身を投じた古事記のクライマックスに及びました。その海は浦賀水道の辺りと言われています。海が荒れて、命の東征が不可能になったとき、比売の入水により海の上を鎮めて航行を可能にします。比売は波に身を沈めながら

「さねさし 相模さがむの小野に もゆる火の 火中ほなかに立ちて 問ひし君はも」

とかつて枯草の燃えさかる中、命は比売の身を案じて下さったと感謝の言葉で別れるのです。余りにも美しく、強い衝撃を受けられたとのことでした。

倭建命と弟橘比売が祀られている、横須賀にある走水神社はしりみずには、機会があればご訪問されたいとお言葉で、一同現実に戻りました。

約三十分の短い時間でしたが、わが町「鵜沼」を逃げ水（俳句では春の季語だそうです）のすばらしい思い出と共に大切に御心に留めて下さっていること、そして、弟橘比売のお話など神奈川の海に因んだ古事記の世界を熱く語っていただいたこと、私にはただただ有り難く、心からの敬意を表したのであります。

鵠 沼 随 想

関根 久男（会員）

——小田急線の開通——

昭和4年に小田急電鉄が藤沢駅から片瀬江ノ島駅まで開通した。このころ「東京行進曲」（西条八十作詞）という歌謡曲が大ヒットした。4節のうち1と4は

1. 昔恋しい銀座の柳／仇な年増を誰が知ろ

ジャズで踊ってリキュールで更けて／明けりゃダンサの涙雨

4. シネマ見ましょかお茶のみましょか／いっそ小田急で逃げましょか

変る新宿あの武蔵野の／月もデパート 屋根に照る

この歌は、昭和の経済恐慌と軍部が独走する暗い世相から逃れようとする庶民の共感を呼んだ。開通間もない「小田急」の名前は、この歌のおかげで全国的に知れ渡った。

小田急の駅は、藤沢の次が本鵠沼、鵠沼海岸と続き、片瀬江ノ島が終点である。鵠沼海岸あたりまでくると見渡すかぎり松林ばかり。海風に吹かれていっせいにビュービュー鳴り始めるのである。一度鳴り始めると、それは片時も休まず鳴り続けるのである。子供心に、なんと寂しい音であるかと思っていた。

寒くなると風はなぜあんな泣き方をするのだろうか。強く吹く冷たい風が通り過ぎるとき、あの甲高い音を発する、あの寂しげな声を聞きながら、自然とは思議なものであると思った。温度の差によって起きる音、風で磨かれた音。

春になると、鳥の声を聞きながら、麦踏みが始まる。両手を後ろに組んで、麦の青々とした株の上を黙々として歩く。おそらく都会からの移住者であろう人がもの珍しそうに眺めていた。農民は伊勢山公園の晩鐘が鳴るまで作業を続けるのが常だった。

当時の本鵠沼駅の利用客は、朝夕は多いが、昼間は一電車から5、6人降りればいい方であったから、退屈そうな顔の駅員が一人で何でもこなしていた。

駅の周りに浅場養鶏場があり、卵を直売していた。鶏がコッコ、コッコと餌をついばみ、仲間同士でふざけあっていた。電車から降りてくる客を見ると、いっせいにそちらを見るが、また直に餌をついばみ始める。時折、赤いトサカを立てた数羽の雄鶏が、大勢の雌鶏を制するようにコケコッコーと関の声をあげる。

あるとき、夜中に養鶏場で突然、鶏たちの大きな鳴き声がするので、主人が見回りに行ったところ、鶏がイタチに襲われていたということもあった。本鵠沼にもイタチがいたのである。

——鵠沼小学校に入学——

小田急線が開通した同じ昭和4年、鵠沼小学校に入学した。当時の小学校は、現在の校庭や校舎の反対側、鵠沼新道側に建っていた。関東大震災のときに被害を受けたが、校舎には倒壊を防ぐための突っ支い棒がされ、冬場には隙間風が容赦なく侵入するボロ校舎だった。

やがて普門寺側に新校舎が完成したが、新校舎で授業を受けることができたのは4年生以上に限られ、年少の私たちは古い校舎でそのまま授業を受けた。子供心にうらやましく新校舎を眺めていた。

最初に手にした「ハナハト マメマス」の国語教科書は文語体で、すべて挿絵まで白黒の古典的なものであった。算術や書き方の本までが、教育というより、かたくなな学問や書道書といった趣であった。

校長先生からは修身教育を受けた。天皇に忠義を、父母に孝行を説く教育勅語の意義と重要性を熱心に教えられた。受持の白井信太郎先生は明治生まれで、スパルタ教育で有名であった。6年間この白井先生に鍛えられた。先生の指導方針は、一日も早く軍国青年になり、陛下の赤子として、大東亜建設に役立つ精神と身体を鍛えていくことにあった。

小学校の周りには自然があふれていた。大きな松の木、田んぼ、小川があった。メダカ、フナ、ナマズ、ドジョウなどがたくさんとれた。みんなで夢中になってとっていて、授業に遅れ、大目玉を食ったこともあり、いまでも懐かしく思い出される。

当時、鵠沼には小学校が一つしかなかったから、海岸の子供もみんな鵠沼小学校まで通った。子供の足で40分以上かかった。そのため別荘に住む子供のなかには、小田急で鵠沼海岸から本鵠沼まで電車通学する仲間もいて、とてもうらやましく思った。

——茅葺き農家が点在——

昭和7年ごろまで現在の日本精工藤沢工場の北門前、秋元食品化工株式会社の倉庫のあるところに「県立養蚕試験場」があった。

養蚕は高座郡北部から普及し始め、鵠沼の零細農家に至るまで広がっていった。

ところが京浜地方の人口増加、景気上昇、消費の拡大にともない、甘薯、野菜、旬のもの、桃、西瓜などの販路が拡大するにつれて、必然的に桑畑はこれら作物に取って代われ、鵜沼の養蚕業は衰退した。

当時の農家はほとんど茅葺きだった。草の屋根は苔むしているものもあった。苔から草が生え、白や黄色の花が咲いていた。木の実が落ちて育ったのだろうか、小さな木が生えている屋根もあった。

草家に入って2階に登ってみると、三角形の広い空間がある。屋根の裏側で茅葺き屋根の構造がよく分かる。太い丸太が屋根の要所の骨格となり、それに中ぐらいの丸太が組まれ、わら縄で縛られている。ところによっては木の皮が使われている。さらに細い丸太が網の目に組まれており、その上に茅が敷き詰められている。先人たちの生活の知恵に感心した。

草の屋根は鵜沼の風景の中で生きてきた。日本の家屋でこれほど美しく、自然と調和したものはないと思う。しかし、戦後の都市化とともに、あっという間にその姿を消していった。

——浜辺は鰯の大漁——

一方、海では漁業が盛んに行われていた。とくに鰯は大量に獲れた。新家網、大正網、新網、キス網、高網、堀川網などの地引き網があり、浜辺はたくさんの人で賑った。獲れた鰯は食用に回るものもあるが、ほとんどが日干しにして肥料として販売された。鰯をもらいたい一心で、網を引くのを手伝った。

頭上では、トンビやカモメが鰯を狙っている。カモメの群れの中の一羽が急降下してくる。つづいてトンビも急降下。せっかく漁師が獲った鰯をかすめ取る。

浜辺では風の微妙な変化により風紋ができた。自然の創り出した芸術である。白砂にまみれ、裸足で歩くと気持がよい。足で地面をたたき、大地に何事かを伝えているようにみえる不思議な感覚を覚える。

遠くに目をやれば、前方に大島、左に江ノ島、片瀬、腰越とつづき、三浦半島がよく見える。西を向けば富士山から箱根や伊豆の山々、近くには小和田海岸の沖合に浮かぶ烏帽子岩。それを含む三十を数える砂岩層と火山岩からなる姥島。"主峰"は海拔14メートルあり、釣りのポイントとして親しまれていた。

古きよき時代の鵜沼は自然に恵まれた半農半漁の村であった。草葺き屋根の農家が点在し、いろいろな作物が作られていた。浜では漁が行われていた。海岸には松林に囲まれた別荘があった。のどかで、ゆったりと、おおらかに時が過ぎていた。

辻堂の南部の歴史を訪ねる

小林政夫（会員）

辻堂の地域は、現在は辻堂駅を中心にして発展していますが、昔は南部では鎌倉街道の街村としての本村地域が中心地でした。辻堂駅は、畑の広がる西のはずれに設置されたため駅付近には歴史的な遺跡は残っていません。

今回は、辻堂の本村地区を中心にして、残された史跡をご案内します。

（訪ねる会は平成12年11月14日に行われた。）

1、熊の森権現社跡

以前は、僅かに残る砂丘の上に、鳥居と小さな石廟を持つ熊の森権現社があった。この権現社は、畠山重忠によって建てられたと伝えられ、また、この地は熊谷次郎直実の領地であったことから、熊の一字をとって熊の森としたと伝えられる。現在は、マンションが建てられ、以前とはすっかり様子が変わってしまったが、再建された権現社の石廟は残されている。

境内には、西行法師の歌碑『柴松の くずのしげみに 妻こめて となみが原に 小鹿なくなり』が建てられていた。現在の歌碑も再建されたもの。西行の「異本山家集」には、この歌は

相模の国の砥上が原にて

しかまづの 葛のしげみに 妻こめて 砥上が原に 雄鹿鳴くなり
となっており、碑面の歌とは異なっている。

※ 熊の森の地名の由来には『隈の森』の説もある。

2、西町の道祖神

鎌倉古道と別れ本村の集落から西に向かう光明真言道場道が小和田道と別れる辻に、文化五年（1808）の銘を持つ双体道祖神塔が立っている。この位置は、昔から変化がなかったものと思われる。辻堂の集落は、江戸時代には、東西南北の四つの集落に分かれ、現在でも各集落の当時のはずれには、道祖神塔が残されている。

また、道祖神塔の周辺には、墓地が多く見られることから、葬送の習慣をうかがうことができる。

3、八幡神社

創建年代は不明。祭神は、品陀分命^{ほんだわけのみこと}。『奉造営正八幡一社干時文化九壬申(1812)夏五月吉日』の棟札が残されているという。境内のタブの大木の年代から見ると、かなり古くから社が建てられていたものと思われる。神社前の狭い道路は、古い鎌倉古道ではなかったのか？

4、三つ又

西町町内会館前の三叉路。昔の交通の要衝であった。鎌倉街道・光明真言道場道・大磯道の分岐点。

5、八森稲荷^{やつもり}(西町の稲荷)

三つ又の南側にある稲荷神社。八松稲荷という八松ヶ原の地名を残す稲荷は、ここか東町の稲荷かはっきりしなかったが、ここに八森稲荷と呼ぶようになったことから、東町の稲荷が八松稲荷と認められたこととなる。

この稲荷の境内にある鉄板は、海岸の海軍演習場で砲弾のテストに使用されるもので、未使用品。使用したものは、^{てつはし}鵜沼大東森井商店前の道路に埋められている昔の鉄橋。

6、白山神社

祭神は久久理姫命^{くくりひめのみこと}。地元では白山稲荷とも呼ばれ、三島明神も配祀している。

白山・三島ともに漁業に関係のある神様なのでここに勧請したものと思われる。配祀神の三島神社の棟木に、「安永三甲午(1774)天七月大吉日……」の銘があることから、白山神社の勧請は、それ以前の事と思われる。また、ここには昔「相模の笠木」と呼ばれる松の大木があり、相模湾を航行する船の良い目当てになっていたと伝えられている。この松は天保年間(1830~1844)のある年、どんど焼きの火が燃え移り焼けてしまった。漁の目あてになる木があった事も、神社勧請の理由であったものと考えられる。

7、四つ角

かつての辻堂村の中心地。辻堂は初め、徳川氏の直接の支配を受けていたようだが、家光の時代頃には、保々、戸田、高木、森川の四旗本の采地になり、東西南北の集落地が形成された。四つの集落の境が集まるところが、四つ角である。旗本四人による支配は、宝暦十二年(1762)まで続き、その後明治維新まで幕府領

となるが、四分割された形態は、現在まで引き継がれている。

8、宝泉寺『海龍山観音院』（真言宗）

本尊聖観音。創立は建久年間(1190～1199)頃、源頼朝の勧請によると伝えられ、また古くは辻御堂と呼ばれ、辻堂の地名発祥の場所とも言われる。俗に「南の寺」と呼ばれ、江戸時代は、光明真言道場として、参詣人で賑わった。

境内に隣り合って、諏訪神社があり、宝泉寺がこの神社の別当を勤めていた時代の神仏混交の名残が見られる。この寺の境内には、多くの石造物が見られる。

9、諏訪神社

祭神、^{たけみなかたのかみ}建御名方神・^{やさかとめのみこと}八坂刀売神。創立は平治年間(1159～1160)とも建久年間(1190～1199)とも伝えられる。代々の領主に崇敬が篤く寛永八年(1631)火災にあい、領主保々貞則により再建された。本殿神座を二分し、左に上諏訪神社、右に下諏訪神社を祀る。

辻堂地区全体の鎮守で、祭礼には東町の源頼朝、西町の源義家、南町の武内宿禰、北町の神功皇后の四基の人形山車が練り歩く。(山車は市指定文化財。平成5年11月1日指定)

10、社宮神（田畑明神社）

祭神は^{おおひるめのみこと}大比瑠女神。創立は元禄年間(1688～1704)。地元では田畑稻荷または「でんぱくさま」と呼ばれ、田畑の実りを祈願した社であった。

相模風土記稿には、『田畑明神社、宝珠寺持、社後に片葉の^{よし}葎を生ず』と書かれていて、『片葉の^{よし}葎』の伝説が残されている。

※『片葉の葎』の伝説 ……鎌倉時代、佐々木四郎高綱が義経に従って木曾義仲追討のために京都に向かう折、辻堂を通過した。道端で兵列を見送る村人に支度のみすぼらしさを笑われたのを怒った高綱は「この村に長者なし」と言って鞭の代わりにしていた葎を逆さに地面に突き刺した。その後ここに生える葎は、片葉であるという。

11、八松稲荷神社

かつてこの付近が、八松ヶ原と呼ばれていた地名を残す唯一の神社。祭神は、^{うがたまのみこと}宇賀魂命。文治年間(1185～1190)の勧請と言われている。特に漁業に従事する人々に信仰が厚かった。

12、東町の道祖神

東町の外れ、民家の石垣の上に立つ文化四年（1807）の双体道祖神。そばに五輪塔の残片が残されている。この付近が東町集落の外れで、墓地も多い。

13、阿弥陀堂

創建の年代は不明。慶長（1596～1615）に村内の浄土宗信徒により建立されたと伝えられるが、保元（1156～1159）の頃の創建で、村の念仏講の女性たちの念仏堂であったともいわれる。相模国準四国八十八箇所十一番札所の弘法大師像をはじめ阿弥陀如来像・十一面観音像等の石仏が並んでいる。辻堂の地名の起こりをこの堂に求める説もある。

14、日枝神社（北の山王社）

祭神は^{おおやまずみのみこと}大山咋命。地元では山王社と呼ばれている。創建年は不祥。境内には寛政元年（1789）の銘を持つ北町の道祖神が建てられている。

15、宝珠寺『八松明王院』真言宗

本尊、不動明王。創立は文治年間（1185～1190）頃。初めは四つ角の近くにあったが、元禄七年（1694）火災にあいその後しばらくは草堂のままであったが、文化元年（1804）現在の地に移して再建された。南の寺に対して「北の寺」と呼ばれる。

境内にある寛文六年（1666）の庚申供養塔は、市指定文化財。相模国準四国八十八箇所九番の札所。

16、天王山

元天王社が建てられていたので天王山と呼ばれている。宝珠寺の土地で、辻堂地区の典型的な砂丘の姿を残している。牛頭天王を祀る社はなくなっているが、神道関係の碑が並んで残されている。

【資料】

- 辻堂の旧氏族（建久年間1190～1199）に西国の落武者の一団十七名がここに移住して、土地の開発に当たったという伝承がある。

石井、桜井、吉田、山田、植木、森、川延、高橋、相沢、門倉、広野、曾我、田中、落合、斎間

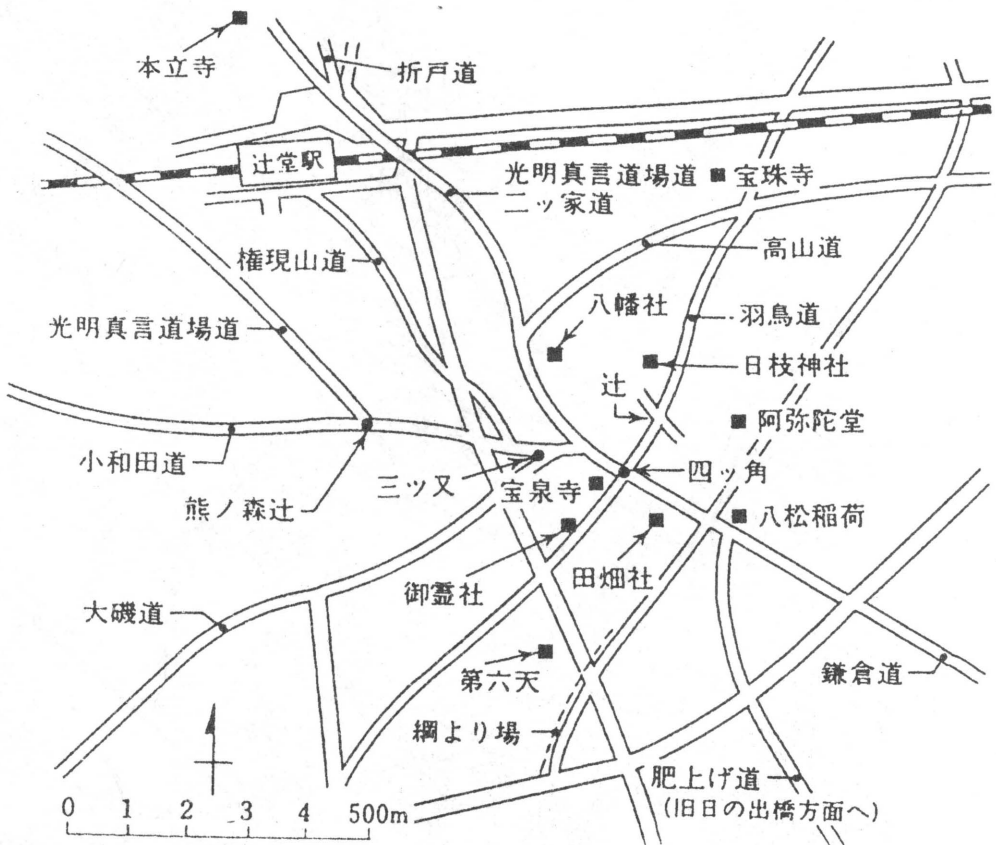
● 辻堂の統治者

- ・江戸時代の初めから元禄の頃まで-----幕府の直轄地
- ・元禄のころから宝暦十二年まで -----旗本四人の采地
(戸田、高木、森川、保々の四家)
- ・宝暦十二年から明治維新まで -----幕府の直轄地
(天明元年=1781=辻堂海岸は幕府の炮術練習場となる)

● 江戸時代の辻堂村

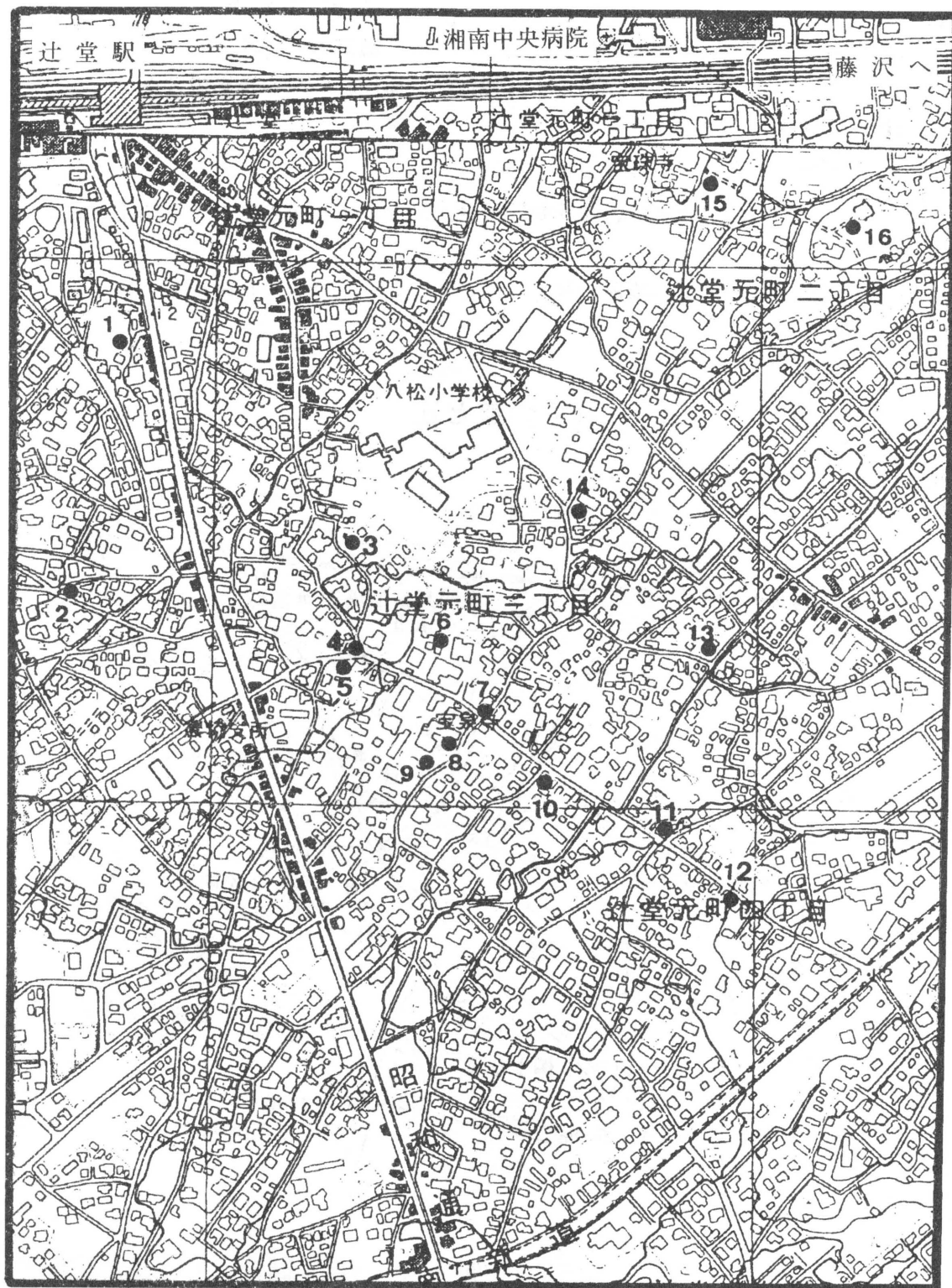
- ・農地 7割 田地 3割
- ・辻堂の集落の初めは、砂丘間の後背湿地に水田を求めたことに始まると考えられる。
- ・北ほどよい水田、畑地が多く、南にくるにしたがって地味は悪い。

辻堂の道と辻



辻堂の史跡

(地図上の番号は本文の番号と見合っている)



(平成12年10月～平成13年3月)

総務委員会

平成12年10月例会 10月17日(火)10時～12時 16名出席

- 議題1. 公民館祭りについて -10月28日、29日に行われるが、前日の展示物取り付け作業、当日午前、午後の会場当番、及び終了後の撤去作業等の役割分担を決めた。
2. 史跡めぐりについて -11月14日(火)辻堂南部地区。辻堂駅改札口13時集合。参加予定 9名。案内説明は協力会員の小林政夫先生がされる。
3. 11月の例会日程変更について 一定例の第2火曜日は辻堂史跡めぐりを行うため、11月7日(火)に変更する。
4. 東屋記念碑について -10月31日(火)鵜沼公民館にて設置委員会を開催予定。
5. その他 一会誌第81号配布担当者を決めた。商店街用には別途増刷する。

平成12年11月例会 11月7日(火)10時～12時 14名出席

- 議題1. 公民館祭りを終わって -10月28日曇り、10月29日雨、と両日肌寒く来観者が少なかったが、「鵜沼商店街の今昔」というテーマの展示物を興味深く見る人で、会場は盛況であった。今後の課題は、折角大勢来られても会場が狭くて説明が十分できなかったのも、来年からもっと広いところを会場にすること。
2. 今年度の新年会について -1月16日(火)の予定、例会終了後に行う。
3. 東屋記念碑設立について -10月31日に打合せあり、会長より内容報告。
4. その他 一鈴木 三 会員より「鵜沼を語る会」の会史を作りたいと提案があった。

平成12年12月例会 12月19日(火)10時～12時 18名出席

- 議題1. 新年会について -平成13年1月16日(火)10時より例会終了後、会場を移して鵜沼海岸駅前「丸政」にて行う。会費1000円、例会出席者全員の会費を徴収した。
2. 「鵜沼の渡辺邸保存」市への陳情について -鵜沼の歴史的建造物が、持主の事情で売却され取り壊されることになり、何とか保存できないかと、「鵜沼の渡辺邸と文化財を考える会」が中心になって藤沢市に陳情するため、署名活動をする事になった。会としても活動方針に沿ったものであり、賛同者として名を連ねることに事後承諾を得た。
3. 東屋記念碑についてその後の経過 一案内板の文章を佐江先生が作成されたが、会として2、3の訂正箇所があり、会長が佐江先生に要請することになった。
4. 11月14日に行われた辻堂史跡めぐり 小雨模様の肌寒い日、参加者9名。
5. その他 一前会長高木夫人 より「なぎさクラブについて」の興味深い話があった。

平成13年1月例会

1月16日(火) 10時~12時 23名出席

議題1. 会誌「82号」について 一鈴木 三 会員より「東屋記念碑建立記念特集号」とし、発行は4月初めにすると報告があった。

2. 東屋記念碑について 一会長よりその後の経過報告があった。

3. 今年度の会の活動について 一昨年に行った、活動に関するアンケートの集計結果を基にして、郷土史サークルとしての会を活性化させるために何をしたらよいか、会員の意見を求めたところ、具体的な取り組みについて多数の意見が出た。

4. 新年会 一例会終了後、鵜沼海岸駅前の料理屋「丸政」にて24名出席。各人持ち寄りの品物を景品にして、佐藤、野口、浅野会員の世話でビンゴをやり盛り上がった。

平成13年2月例会

2月13日(火) 10時~12時 16名出席

議題1. 会誌82号について 一東屋記念碑建立記念特集号とする。内容は編集委員会で決定。

2. 東屋記念碑について 一案内文の最終案を会長より報告され決定した。除幕式は3月20日過ぎの予定。

3. サークル・公民館共催講座について 一東屋記念碑建立を記念して、東屋についてのシンポジウムを開催する。テーマは「東屋と鵜沼文化」とし、パネラーには、テーマに合った藤沢在住の作家や文化人を予定。時期は5月中旬、ホールを使用すること等を決めた。

4. その他 一(1)渡辺邸の所有者より、建物を藤沢市に寄付する申し出あるも、折り合いがつかず不調に終わったとのこと。(2)東屋関連年表を伊藤会員が作成し説明された。

新入会員 岡田哲明氏紹介。

平成13年3月例会

3月13日(火) 10時~12時 17名出席

議題1. 5月の総会について 一(1)来年度の会の事業計画、公民館祭り、史跡めぐり等について具体的な提案を呼びかけたが、特になく、来月に持ち越しとなった。なお、公民館との共催講座「東屋シンポジウム」の期日は、都合で6月2日(土)午後予定。

石碑建立の経緯から、本件は市の教育委員会が主催することが妥当とのことで、公民館長や市長に開催要請することになった。2. 会則の変更、役員の交替等についてそれぞれ2、3の意見が出たが決まらず、4月例会に持ち越された。

2. 東屋記念碑除幕式について 一3月22日(木)午前10時より公民館で式典を行い、その後現地で除幕を行う。会員の参加は10名の予定。

3. 渡辺邸の保存についてその後の経緯 一先月会長より不調に終わったとのことであったが、その詳細について佐藤会員より報告があった。

4. その他 一岡田会員より鵜沼ゆかりの「碓伊之助画伯について」話があった。

編集後記

*念願の東屋記念碑が建立され、21世紀最初の会誌『鶴沼』（82号）をその特集で飾ることができました。ご同慶の至りです。

*佐江衆一氏と共に先頭に立ってその設置を提唱されてきた小山文雄氏にまず記念執筆を願い、東屋最後の経営者長谷川欽一氏のご子息祐（ゆたか）氏からかけがえのない思い出と創業者伊東将行氏の縁者として右近氏から丁寧なご挨拶をいただきました。そして戦時下、東屋の敷地内に住んでいらした佐伯氏から貴重な記憶を寄稿いただき、最後に東屋関連年表をつけ、全体として記念碑設置の特集にふさわしい内容になりました。執筆者各位に対し厚く御礼申し上げる次第です。

*記念碑設置の経緯については概略が巻頭に述べられていますが、結局は鶴沼の人々の東屋に対する新たな想いが結集した結果だと思います。そして、その一つの契機となったのが会員高三啓輔氏の『鶴沼・東屋旅館物語』（1997）ではなかったでしょうか？

*萩原朔太郎らと共に群馬を代表する詩人高橋元吉もまた短期間ですが、鶴沼で最後の晩年を過したそうです。当時の詩を中心に会員伊藤聖氏に紹介していただきました。

*「鶴沼の歴史的家をたずねて」も会員榛葉・川島両氏のおかげで途切れることなく、「大齋藤」家を取り上げることができました。明治初年からの典型的な主屋敷として当然保存されるべきでしょうが、本誌80号で紹介された「渡辺邸」もついに消え去ることになったそうです。

*その他元会長高木氏夫人の「なぎさクラブの思い出」、番場定孝氏の「皇后陛下の読書の思い出と疎開地くげぬま」など、今回もまた豊富な内容となりました。（鈴木）

『鵠沼』 第82号

平成13年3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸2-10-3

鵠沼公民館内

電話0466-33-2001

鵠沼 82号

「東屋記念碑」 設置記念特集号

目 次

特集 まえがき	1
「東屋記念碑」設置までの経緯	編集委員会 2
東屋三題	小山 文雄 5
資料編 江見水蔭『記心 明治文壇史』	9
写真に見る東屋と鵠沼	
長谷川家のアルバムから	10
関東大震災後の東屋見取り図	池田 真弓 長谷川 祐 12
子どものころの東屋	長谷川 祐 14
資料編(写真) フランスへ旅立つ長谷川欽一氏の壮行会	16
再録 私の鵠沼	長谷川欽一 17
将行の縁者として感謝	右近 ミサ 19
戦時下の東屋	佐伯 忠男 20
資料編 二つの新聞記事	23
東屋関連年表	編集委員会 24
資料編 初の別荘実態調査	26

鵠沼の歴史的家屋をたずねて⑦

典型的な名主屋敷「大斎藤」家

伊藤 聖 榛葉昭市 川島弘之	27
講演 なぎさクラブの思い出	高木千恵子 36
鵠沼時代の高橋元吉	伊藤 聖 40
皇后陛下の読書の思い出と	
「疎開地・くげぬま」	番場 定孝 46
鵠沼随想	関根 久男 48
辻堂の南部の歴史を訪ねる	小林 政夫 51
「鵠沼を語る会」活動の記録	総務委員会 57
編集後記	59